

器が、實地の戦場に試験されて、其効力が検定せられると同時に、交戦の目的を達するため、各交戦者が智力を絞りて、新案を作り出すからである。過去の日露戦争後に於ても、海陸軍兵器の進化は實に顯著なるもので、海軍の如きは、此の戦役を限界として、其前後に隔世の感ある程である。即ち同じ十二吋砲でも、日露戦争當時のものと、其後に出来たものとは、効力に於て二倍以上の差あるのみならず、更に十四吋徑十六吋徑と膨大し來り、又水雷は十八吋徑より二十一吋徑に進み、其効力が四倍以上に増して居る。又、艦隊を防禦する甲鐵も、日露戦争當時の十吋甲鐵は今日の六吋甲鐵にも及ばず、機關には「タービン」が應用されて、艦船の速力が著しく増進し無線電信の如きは、四百哩の通信距離が六千哩即ち十倍以上に

延長してゐる。されば日露戦争以前の艦艇は、今日に至り實際在るも無きも同様で、其の以後に現はれた、所謂弩級艦が新主力を成し、之に大型驅逐艦、潜水艇、飛行機等が新に加はりて、殆んど全部其性質を異にしたる新海軍を型造するに至り、此の戦争以前の舊式軍艦は勘定外に除き、各國共に新規に新海軍を創造せねばならぬ始末となつたのである。

陸軍に於ける兵器の進化は海軍程ではないが、是亦大に従來の面目を改めて居る。其歩兵騎兵等は日露戦争迄一兵一銃主義の武装であつたのが、其大隊若くは中隊毎に若干の機關銃を増附し、其戰鬥力は従來の一倍半乃至二倍に増進した。又其の砲兵も、砲其物に著しき改良ありたるのみならず、野戦重砲隊の建制をも見るごとくなり、攻城砲に至りては、更に一



段の進歩を遂げ、今次の大戦に獨逸が始めて持出した、四十二瓏砲の如きは、戰場に持來ると直に打出し得る砲架仕掛けて、野戦にも之を利用され、實に偉大なる威力を發揮して居る。二十八瓏の要塞砲を攻城に持出し、砲床を築きて打出すなどは、日露戦争では新機軸であつたが、此の四十二瓏の貨物に對して最早顔色ないのである。安府の堅塞が僅々三回で陥落したのも此の怪砲の爲めで、而も之れが開戦迄秘密にせられ不意に飛出されたから更に其效力を倍加せる譯である。其他飛行機、陸上無線電信機或は軍用自動車（ユージュラシヤ）の如きも、日露戦争にはなかつたもので、此等は何れも偵察とか通信とか運輸などの隠れた仕事をして居るから、未だ其效用の如何を傳へられないが、實際は今度の戦争に少からぬ能力を發揮して居るのである。

以上は過去が生み出した現時の進化であるが、偕て今度の大战が濟んで、將來の兵器が如何に進歩するのであらうか。自分の想像では此の戦争が有史以來未曾有の世界的戦争である丈に、其結果に依りて生ずる兵器の進化も、亦甚大なるものがあるだらうと信ずる。兎に角専心注意して歐亞の海陸に於ける大小の戦績を觀察し、他日の兵器改良の資料を蒐集し、以て武備の實力に缺陷なき様にせねばならぬ。

偕て海軍に於ては、今日迄の處格別の大海戦がないから、未だ何とも、判断は附かないが、已に潜水艇は北海方面にても又波爾的海にても、著しき奇功を現はして居る。現に一隻の獨逸潜水艇が、瞬く間に英國裝甲巡洋艦三隻を續連撃沈したるが如き、確に一大異績で、潜水艇の價値は大に



認められたが、現下歐洲の海面で、各交戦國數百隻の潜水艇が活動しつゝ、あるより考察すると、其奏功率は未だ思つた程に多くないやうである。元來潜水艇の効力が驅逐艦の上に出でたりしは、主として其の速力の足らざる點にありて、今日迄の發達程度で、其最大速力は實際水上にて十八節、水中にて十節位であるから、洋中に航走せる最新弩級戰艦（最大速力二十節以上）に追窮して、之を攻撃するの脚力がないのである。されば最近獨逸潜水艇の奏功も敵艦が漂泊停止せるか、或は徐航して居た場合にのみ起つたものである。然し、潜水艇の速力を増進するは、各國造船家の苦心焦慮せる處で、又此戰爭で一層の智慧を絞りて、工夫するだらうから、戰後否戰爭の冬期に至れば、多分二十節以上の潜水艇が現出するであらう。若

し其速力にして二十五節に達するを得ば、潜水艇の戰鬥能力は驅逐艦を凌駕するに至らんかと信ずる。又之に對して今後の考慮を要するものは戰艦、巡洋艦等の水中防禦である。今日迄の軍艦は、主として敵弾に對し、水際及び水上舷側に厚き甲鐵を張つたものであるが、一發の水雷で不意に擊沈さるゝ場合多きものとすれば、更に水面以下に於て外部若は内部に適當の防禦法を施す工夫を凝らさねばならぬ。左すれば自然重量も増加するから、砲装を少くするとか、装甲を落とすとか、或は速力航續力を減ずるとか、兎に角戰艦の構造に多少の變化を來すであらうと思ふ。世には已に潜水艇萬能論者もありて、高價なる戰艦一隻を造らんよりも廉價の潜水艇十數隻を得るに如かずと唱ふる人もあるが、夫れは未だ早過ぎるやうである。如



何にも一隻の小潜水艇が、三隻の大艦を一時に撃沈するが如き實例も現はれたが、之れは所謂奇功で、何時も斯くあるべきものでもなく、完全に之を攻勢的に應用し得る迄には未だ中々其發達距離があるから、矢張り主力たる戦艦あつての潜水艇で、潜水艇ばかりで攻勢作戦を行ふ譯に行くものではない。

飛行機飛行船等も亦今度の大战に初めて用ひられ、爆彈投下で、大分威嚇的效力を顯はして居るが、其爆彈の塔載數量に限りがあるのみならず、其命中效率も少き爲め、破壊機關としては未だ大砲にも水雷にも遠く及ばないやうである。然し偵察搜索の機關としては、上から見卸す丈けに、是迄にない偉大の效力を發揮して居る。之れも尙ほ其機體を軽く且つ大にし

て、乗員と兵器の積載力を増加し得るに至つたなら、更に一層其效用を大にするであらう。

兎に角潜水艇と云ひ飛行機と云ひ、今度の戦争が初舞臺で、未だ其應用の初期に屬し尙ほ發達の前途は遠々と云ふべきものである。然し人智の向上には際限なく、今に戦艦が水中を潜り、巡洋艦否な巡天艦が空中を飛行する時代が到來して、平面戦闘が立體戦闘に推移すべき筈で、一戦を経る毎に一步々と其階段を上りつゝあるのである。

翻つて陸戦の状況を見るに、戦闘の遣方も大分變つて來たやうで、日露戦争の當時より已に其の傾向を呈して居た、廣正面(百里以上)の野戦は、最早常式定規の如くなつて仕舞つた。蓋し茲に至つた所以は、兵器の進歩せ



るため中央正面の突破が益々六ヶ敷なつて、對抗軍の双方共に敵の側翼を衝かんと欲し、自然に自己の兩翼を展張するからでもあるが、又飛行機を以てする搜索偵察の能力が著しく進歩して、對抗兩軍の兵力も運動も、手に取る如く双方に早く分り、一方が兵力を増加すれば、他方にも直様に應ずるの用意をなし、以前の如く自己の兵力と行動とを隠散して、敵の不意に出で、其備なきに乗ずるなどの仕事は愈々困難となり、爲に唯だ正面を擴張し、正味の實力を以て正々の對抗をするの已むを得ざるに至つた結果であらう。斯く正面が廣がりて數十箇の軍團が二百里にも互り展開して戦闘するやうになつては、二日や三日では其正面を換へることはならず、此方で一翼に増兵すれば、彼方でも直ぐに之に對するだけの増援をな

し、去りとて無理に平押し正面攻撃をすれば兵力の損失のみが多く、廻らにも廻られず叩くにも叩かれず押すにも押されず、唯だ四ツに組んで手の出し様がないといふのが、先づ現下佛獨國境又は獨露國境附近に於ける陸戦の真相で、双方共に激戦に激戦を重ね、随分人も殺し、彈丸も費やして居る割合に、戦況の變化せざるも之が爲であらう。

斯くなつて來ると、戦闘の勝敗は唯だ兵力の優劣のみで決する譯だが、其の兵力の優劣が主として兵員の多寡であるか、或は兵器の鋭鈍であるか、未だ疑問に屬し、尙ほ今後の戦績經過と、戦後の戦績調査とに依り研究決定せねばならぬ。然し、已に前段にも述べたやうに、四十二冊の如き砲車式巨砲が攻城にも亦野戦にも用ひらるゝものとすれば、是迄の野砲は之に



比して小銃も同様で、終には砲兵が陸軍の主兵となりて歩兵は補助兵となるかもしれない。又歩兵も益々其機關銃を増加し、單純なる一人一銃主義で押通す譯に行かぬやうになりはすまいか。又飛行機隊が彼様に能く偵察搜索の任務に當るとすれば、騎兵の主務は之れに奪はれ、却て乗馬歩兵即ち運動力の大なる銃隊として、今日の騎兵を利用し、之に騎砲兵を加へて一種の騎兵師團(歐洲には已に在生すれども)を形成するであらう。其他兵員に比し銃砲数の増加するに従ひ彈藥の補給が益々面倒となり後方勤務の組織に大革新を來すこととならん。固より鎗や刀だけならば、彈藥補給の面倒は少しも無い様であるが武器の進歩に伴ひ、後方勤務の益々複雑となるのは自然の趨勢である。

此等は先づ近き將來に於ける海陸軍の進化に就ての豫想で、更に遠き將來を望めば、矢張り飛行機飛行船の發達に制壓せられて、終には地面執着せる陸軍も、又水面を離れることの出來ぬ海軍も、共に無用無能の廢物と化し去り、所謂天軍萬能の時代となるであらう。之を想へば、實に後生は怖るべきもので、年々歳々刻々に變遷しつつある事物の進化に留意し、眞理を履んで、能く其の當時に適切なる施節と準備とを怠らぬものが、最終の勝利を占むるやうになるのである。(大正三年十月)



### 歐洲大亂の心的原由

マツチ一本で武藏野を焼く——獨逸を過らしめたる自我主義——朕は天命を奉じて世界に君臨す——獨逸の思想と二大哲學者——自我主義の末路——チエートン民族は本來低能なり——短期戦策の失敗——獨逸思想と我が思想界——物心兩方面の不調和

此の歐洲の大戦亂が、奥國の皇太子を射たる塞耳亞兇徒の拳銃一發に起り、宛かも燐寸一本が武藏の全野を焼けるが如きものであるが、之は單に導火で、其當時吹いても消え、又其儘にして置いても、斯く迄の大火となさずに、消し止め得たものであつた。然るを、斯く炎上蔓延せしめた、當



の責任者の誰なるかは、言ふ迄もなく、已に明白で、歐洲各交戰國の外交文章等を取調べ見ても、其獨逸たるは疑を容るべき餘地がない。カイゼル陛下が加筆されたと傳へらるゝ、彼の奧太利の對塞最後通牒の文句を見ても、其挑戰的なるかは明かに讀まれ、又獨逸も奧太利も、其時より直様な真面目の戰鬪行動を開始したることも、今日は普く世に知られて居る。尙ほ湖つて見れば、獨逸は先年の「モロッコ」事件以來、増税に増税を斷行して、銳意諸般の戰備を急ぎ、特に此開戰前一年間の戰備的施設は、人をして其の尋常ならざるを疑はしめ、當時駐獨佛國大使館附海軍武官の如きは、明かに獨逸に戰意あることを本國に秘報した位である。

最近十數年に獨逸國運の進歩は實に顯著なるもので、科學に工藝に、文

物に制度に、殖産に貿易に、何れの點より見ても、其進運の隆昌なりしは、他外國の羨み且つ悞れたる所である。若し其儘平和的に發展を續け行けば、十年を待たずして、十分歐洲の覇權を掌握し得たと認められた程である。然るに、何を苦しんで短氣に干戈を動かし、無謀の戰争を開始したものが、其外因としては、當時隣邦露佛諸國の國勢揚がらず、且つ其兵制改革の實施が未だ完成されざるを見て、後日の強迫に遇はんよりは、寧ろ先んじて自ら發するに如かずと信ぜしめたる所もあれども、抑も亦獨逸自身に於て、之を敢てしたる、心的内因の大なるものが伏在して居るのである。今其内因より此惡果を生じたる徑路を探究せんに。

誇大妄想とも謂ふべき極端なる自我主義、是れ近年獨逸上下の思潮を支



配せる心理で、現に其國を過らしめつゝある主因は、確かに之れである、人孰れか自我なからんではあるが、抑も自我は他我と相俟つて成立すべきもので、獨逸の如く、他我を認めざる自我一點張りば、悉く周圍を敵とし、自ら他の存立を認めざると同時に、他よりも亦其存在を許さるべきものでない。獨逸人彼等は言ひ且つ信ぜり、「我チユートン人種は世界の最高等民族なり。吾人はチユートンの文明を以て世界を教化し且つ之を統率せざる可らず。吾人のなしたる文化の貢獻に對し、寸毫も報酬を拂はざる世界は、吾人自ら進んで之を取るの外なく、此大主義に反抗する他の劣等民族は、悉く我が干戈の犠牲たるべし」と。彼等の物質的文化的貢獻少からざりしは、自我共に之を認めれども、必ずしも皆彼等の創始に屬するもの

ではない。其多くは其源を佛の學理、英の實驗等に取りて、彼等は其應用に成功した位のものである。物に榮枯盛衰のある道理をも辨へず、一時の成功に誇りて、直に他を劣視して、獨り顔に振舞はんとすること、僭越我慢の甚しきもので、嗚呼獨逸とは克くも名づけた國稱である。獨逸人の標本とも謂つべきカイゼル陛下御自身も、亦此の自我の結晶で「朕は神の子としてホーヘンゾーレン家に生れ、天命を奉じて世界に君臨するものだ」と自尊せられ、其のホーヘンゾーレン家が、過去の歴史に於て、幾度か露國の庇護に依りて、存続し得たことも、今は全く忘却されてるやうである。曩には、故なくして日清交戦の終局に干渉せられ、或は人種を色別して偏頗なる黃禍を鼓吹されたが如き、其他世界の各方面に對する陛下從



來の外交が、何れも利己以外に何等正義の認めらるべきものなく、夫れて天下が統治され得るものと思召すのが、未だ御修養の足らない所て、神聖なる帝者には毫末の權謀術數もあるべきものではない。而して自我に没頭して、常識を失へる獨逸國民は、此陛下を不世出の英主と崇仰し、唯命之に従ひ、前後をも辨へず、此の慘憺たる大戦亂を勃發せしむるに至つたのである。

「獨逸人の自我思想は、多少其遺傳でもあるが、最近十數年間に彼等の心性が著しく之れに變化したことは、心理上大に研究すべきことである。今少しく其素因を匡さんに、彼の獨逸近年の二哲ニーチエ及びトライチエーケ等の唱導したる、似て非なる哲理が餘程深き感化を獨逸人に與へたや

うである。前者は利己を本旨として個人自我主義を學究的に眞理らしく吹聴し、又後者は獨逸獨尊を標榜して、個國自我主義を歴史的に左もあるかの如く鼓吹したもので、一つは小我を説き他は稍や大我を唱へ、其の自我本位たるに異なる所はない。若し冷靜に之を讀味せば、此等大家の學說も、未だ眞正の唯我に徹底して居らぬことが分明するのである。然るに、理非を判斷するの腦力に乏しき獨逸人は、一も二もなく、此等大家の學說に隨喜して直に之に感化せられ、自我思想は忽ちにして、全日耳曼を風靡し、加之ベルンハーデー將軍などが、尙ほ其上に油を注ぎて、攻勢防禦の主意で、軍事的に進取を鼓吹したから、彼等は悉く我慾と自惚とを混和したる、一種の誇大妄想狂に化成されたやうである。斯く自我一點に固まりた



獨逸人の性格は、近來著しく其行爲に實現し來り、彼等の各個が、已に頗る傲慢薄情で相互の謙讓友愛に乏しきのみならず、此大戦中白耳義、佛蘭西其他の占領地域に於て、蠻行獸爲を敢てし、之を悔ひもせず、恥ぢもせず、又咎めもされず。公法蹂躪、人道無視などは最早彼等の心根に微細の感觸をも與へないのである。凡そ自我性に増長したる者は、其我慾を遂げんが爲め、全幅の精力を發揮するもので、之れは確かに獨逸人個々をして過去の成功をなさしめた一因であるが、又一方に於て、自己の力の及ばざるとき、他に救助慰安の求むべきものなく、終に落膽絶望の悲境に沈むのが、心理上當然の結果で、最近數年間獨逸に於ける自殺者の統計が非常に増加したことは、正しく之を證明せるものである。之を以て推すとき

は、彼等の好んで始めたる此の大戦も、飽く迄も強く、精力のあらん限り盡すであらうが、終に又力盡きて自滅自棄の極底に陥落すること殆んど必然と豫想さるゝのである。

本來チユートン民族は、何ちかと言ふと、比較的一般に低能である。(無論稀には拔ん出たものもあるが)其代り昔の奴隸時代より一種の服従心を遺傳して居る。故に彼のカイゼル陛下の威令にも、亦ニーチエ、トライチエーケなどの學說にも、其是非を判断せずして、一も二もなく、直に服従し、曲りなりにも、國民の意志や思想が迅速に統一さるゝ傾向があつて、權利と義務を経緯とし、規矩準繩を以て治御するには最も適當な人種である。獨軍の軍紀が比較的能く振肅するのも、矢張り此の低能と服従心から由來



するので、而も友愛を以て調和せざる此の如き軍紀は、唯だ石の如く硬い許りで、艱難に遭遇し終に自碎することのあるものである。此の戦亂の経過を見て、世人は往々「獨逸は實に豪い強い」と賞嘆するが、其豪い所強い點が、何處にあるかに就ては、餘り能く着眼されて居らないやうだ（實際は左程に豪くも強くもないと思ふが）若し夫れとすれば、彼の服従心で比較的迅速に意志が統一せられ、團體としての結合が、可成り能く保持さるゝ點と、數年前から遣る積りで諸般の戦備を整つて居つた所位が、見るべき丈けて、彼の所謂軍國主義や、自我哲理や、或は科學萬能などが、彼等強味の根源と思ふたら、大變の間違ひである。之等は却つて其悪用の結果彼等獨逸國民を奈落の底に導くの媒介たるに過ぎないので、其美性と認む

べき服従心すら、悪方に服従すれば、益々其害悪を大ならしむる所以となるのである。

低能を以て盲従されたる不徹底の自我主義が、獨逸の國是を過たしめた主因たることは、大要前述の通りであるが、此に又副因として見逃し難き他の内因がある。夫れは外でもない、最近僅か數年の間に、獨逸の中流以下に社會黨の名を以て蔓延しつゝある自然主義である。彼等は宗教を迷信と認め、道徳を形式と看做し、結婚を異性の娛樂と信じ、之を唱へ之を行ひて憚る所なく、人類をして禽獸に遜からしめんとするものゝ如く、今や其黨員全國に亙りて八百萬以上の多きに達せるの有様である。蓋し此の自然主義は、彼のニーチエの唱へたる個人自我主義が不節制に悪化したるも



ので、宛かも自由が放逸に流れたと同様の心理的變化である。此の恐るべき思潮の流行に對しては、流石のカイゼル陛下も、亦有識の爲政治家等も、痛く其頭を悩ましたらしく、之を矯正するには、人心を外に轉じ、血を以て之を洗ふに如かずと思はしめたかのやうである。故に自然主義は、寧ろ開戦を避くるに努めたるべけれども、却つて之れあるが爲に、當事者の開戦發心を促進したる傾向が認めらるゝのである。

今や獨逸は其完整せる戰備を利用すべき短期策戰の強味を失ひ、却つて其敵國の長所たる持久戰を續けるの已むを得ざる羽目に瀕し、戰爭の最大要素たる人力、資力、及金力共に、將に其缺乏を告げんとする窮境に陥りつゝ、あるので、古風なる伯林城下の盟降に依らざるも、獨塊境上其儘の大

包圍に窮迫せられ、問題は唯だ時日の一點を殘せる今日、尙ほも其自我に執着して悔るを知らざること、敵ながら洵に不憫の極みである。然し元々はれ自ら招致せる所で、行き掛り上最早度するに方なく、終に其行くべき所迄行かすむるの外なきか。

自分が斯く歐洲大戰の心因を討ねて、茲に多言を費すものは、國民思想の變遷が、怖るべき大惡果を發生することを闡明して、混沌たる我思想界に資するの必要を切實に感じた爲めである。獨逸の長所として我國に見做つても可なるものは、細事とも認むべき、其科學應用又は社會組織位で、若し彼の自我主義などを手本としたら、御國の將來に、飛んでもない惡影響を來すかと考へる。我神國傳來の御皇謨は、決して獨逸のやうに他を侵



害して自我を遂げんとする如きものでなく、東西彼此相倚りて、共に慶福を樂しまるゝの御主旨と奉察さるゝのである。昔神功皇后が、三韓を御征服になつても、任那も百濟も又新羅も、各其國を全うし、其民を全うして、決して御侵略はなさらぬ。唯だ此等諸國が相争はぬ様に、日本府を置いて監督せしめられた許りである。近く先帝陛下の御代に、日韓合邦となりても、矢張り此主旨が籠つて居りて、時勢の進運に伴ひ、相互の合意に依り併合となり、御侵略などの意義は毫末もないので、我々臣民は深く此御皇謨の主旨を奉體して須臾も忘却してはならぬと信ずる。之れと同時に、自分は現に獨逸を敵として戦ひつゝある、我國民の思想上に於て一つの懸念がある。それは外でない。和戦は國家の目的で手段にあらざるは勿論、

一たび對獨宣戰の大勅が煥發された以後帝國臣民の衆心は、悉く一つに大御心と合致されねばならぬことである。若し此際萬一にも、日獨同盟の可否などを云爲し、又之を聞いて棄て置く者があつたとすれば、帝國臣道の筋も本も破れてしまふのである。更に一步を進めて極言すれば、苟も我が神國に敵たるもの必ず敗る」と確信すべきを、やれ、獨逸が豪いとか、勝つとか、心中に危惧する丈けでも、帝國臣民の資格に缺くるものではないかと信ずる。

歐洲大亂の原因を近きに探りて、自分の感じた處は先づ此の通りである。尙ほ其遠因を索むれば、色々複雑な歴史的關係もあるが、之を大觀するに、抑も歐洲の所謂文明なるものが、物的方面にのみ向上して、心的發



達が之に伴はないのが、其一大素因で、古來歐洲の生民多數は、貴人や富者が其眼前に示現せる物質的慾望を遂ぐるを以て、人生の最大能事と誤信し、有限の世界に無限の人慾を満足せしめんため、其の組織せる國家迄が相侵害争奪して、此の如き慘憺たる戦亂を惹起せねばならぬ様になるのである。是に於て、吾人は我が神祖の大廟が、白木を柱とし杉皮を屋根とし以て萬世の萬民に清素を垂示し給ひたる神慮の深きに感激せざるを得ない。彼の羅馬古英雄の遺跡などを見做ひ、巴里や伯林に永久的の凱旋門を建立して、歴史的に相互の敵視反目を示現し、之を無上の國飾と誇るやうな稚見では、到底此の天下は治まるものでない。凱旋門などは矢張り、杉の葉で一寸樹て、直に倒するのが本當であるかと信ずる。(大正五年十一月天〇會講演)

### 歐洲大戰の三大力素

予が豫言の中——獨逸の陸軍力——佛國の眞正舉國一致——歐洲戰と家康の戰術——英國の海軍力——獨逸海軍の屏息する理——戰爭と財力——獨逸の財政

自分は嘗て歐洲大戰に於ける最大なる主要素は、獨逸の陸軍力に對する、英國の海軍力と財力との三大勢力である、と云ふたことがある。今次歐洲の戦局を實地に巡回し、之を大觀して見ると、矢張り此の三大勢力が、主要なる原動力となつて作用して居るかの如く思はれる。素より佛・露・英・



伊等の諸聯合國にも、大陸軍があり、獨逸諸國にも海軍力も財力もないのではないが、何れも絶對的超越の力量を持たないから、之を最大要素として、主動せしめ難く、直接又は間接に、他の協力と相順つて作用する譯である。言ひ換へれば、歐洲大戰の勝敗は、主として此の三大勢力の消長で決定するのである。今左に其消長に就て、大體の觀察を述べて見よう。

一、獨逸の陸軍力

敵ながら、獨逸陸軍の精銳なることは、既に交戦諸國軍事批評の許す所である。蓋し其精銳なりし所以は、其戦争に於ても、亦編制と訓練とに於ても、一日の長所を有して居つたからで、開戦當初一年有餘の間は、遺憾ながら我聯合國の陸軍は、之と對抗して充分の勝算がなかつたのである。

爾來西に東に多度の激戦を重ね、獨逸の常備精兵は、漸次に亡失されたが、後備國民兵等を以て之を補充し、戦場の實習で練磨したから、獨逸の陸軍は、今日も尙ほ當初の精銳を可成りに維持して居るのである。去りながら、凡て物の消長強弱は、相對的比較の差等で、相手の力が増加すれば、先の優勝者も後の劣敗者となる譯で、英・佛・露・伊等の我聯合國は、開戦當初に於てこそ、獨逸に比し其戦備も整はず編制、訓練、等も不充分であつたが本來潜勢力の大なる國々であるから、交戦二ケ年後の今日では、何れも皆獨逸に優らざるも、決して劣らざる精兵を戦場に立たしむるようになった。如何に經驗なき年少將校でも、亦新募の生兵でも、二ケ年間實地の戦場に彈雨の下で、日々大演習を續けて居れば、三年の徴兵勤務に服し、年に一



回の秋季大演習で訓練された常備兵よりも強くなるのは當然である。又如  
何に戦備なき軍國でも、二年間金を吝まらず鋭意準備すれば、年々僅かの豫  
算で十年間用意したよりも、優るべきである。

現時の佛軍の如きは、其困難に刺戟される結果とは謂へ、其精神上に於  
ても亦技能上に於ても、中々に見上げたもので、自分の觀察では、獨逸兵  
よりも慥かに優秀であると思ふ。今度の戦争に對する佛國民の發揮した愛  
國心は實際強烈なもので、眞正の舉國一致が自然に實現せられ、平素は犬  
猿も相容れなかつた政派が、共に政府に椅子を並べて、毛頭隔意なく圓滿  
に國事に盡瘁して居るのみならず、下級の労働者に至る迄、軍需品製造な  
どの賃金に有勝の不平を唱へた例は一回もない。又乃木大將の如く、二子

若くは三子を國家に捧げた戦線の將官は幾人もあつて、決して珍らしくも  
なく。普通國民は勿論代議士の多數も、大抵塹壕で砲銃を操つて居るので  
ある。本來佛國は天才國であるが、其政體等の然らしむるものか、兎角平  
時は人物が凡庸以上に其力を伸ぶる譯には行かなかつたのである、處が國  
難は天才に機運を與へて、社會の各階級共に人物が著しく輩出して居る。  
就中軍人の中には、當初聯隊長たりしものが旅團長、師團長、軍團長、軍  
司令官と累進して、今は元帥格の方面軍司令官となつて居るものもある。  
其れに原因せるものか、佛軍の戦闘力は近來格段に發達し來り、其戦法の  
秩序的科學的なる點に於て、一頭地を抜いて居る。殊に之れなくて最早戦  
闘は出來ぬ處の航空隊は、佛軍が最も優勢で、殆ど敵を壓倒して西方戦線



の空中を制有せる有様である。

英國は元來大陸軍を常備せざる國柄であつたが、開戦後より之を作り始めて、今は四百萬の大軍を有する大陸軍國となつた。英國國民の敵愾心も亦非常なもので、餘り示威運動とか、提灯行列のやうな外觀には現はれぬが、其華族の子弟の大部分が戦死せるのみならず『オックスフォード』等の大學々生の殆ど十中八九部が出征して、已に其半数以上戰場に斃れて居るなどに見ても、其義勇奉公の熱度が推測せらるゝ、英人は一體に地味で根氣が強く、彼の大和櫻のやうに、早く開いて直ぐに散りはせぬが、何時迄も變りなく、後になればなる程粘り強くなる特性を持つて居る。戰場で鬚を刺つてるとか、四ヶ月に一回歸休するなどは、彼等民族習慣の然らしむ

る處、却つて其悠長な點に見所もあるので、漫りに此等を見て、其素質如何を云爲するのは、淺見と云はねばならない。殊に英國工業の生み出せる其砲力の優勢なことは、敵軍の辟易する所で、實際今日の陸戦は人馬の頭數よりは重砲の門數で、成敗利鈍を判別せねばならぬ時代となつたのである。

露軍は一昨年中兵器彈藥の缺乏より、『ガリシヤ』方面の戦ひに利あらず、當時地を失ふこと百里、兵を損ずること百萬と註せられた程であつたが、人衆に富める露國は、更により以上の大軍を編制し、友國より兵器の補給を得て、捲土重來、本年は同じ『ガリシヤ』に連勝を得て居る。此の如きは露國でなければ出来ないことで、大國は又大國丈の長所のあるもので



ある。又伊軍の戦備は、漸く最近に整頓したもので、當初は素より進攻の實力に乏しかつたが、今日は最早他に劣らざる相應の兵力を有し。殊に其『アルプス』軍は、山地戦に於て特別の能力を具へて居る。

又獨逸は開戦後、逸早く全國の工業動員を實施した爲め、其兵器彈藥の補給力は、聯合諸國全體のものよりも、多量であつたが、是亦英佛諸國が巨費を投じて其兵器工場を増築し、敵に倣うて工業動員を行つた結果、今日以後の烏が先となつた。而も聯合諸國は海上を占有する爲め、其軍需の過不足を相融通するの大便利あるのみならず、世界の各地より任意に物資を得て、自己の軍用に供し、米國の大工業の如きも、間接に聯合軍の用を爲せる次第である。斯く言へば、或は故意に敵軍を輕んじ、友國を重んず

るかのごとくであるが、全然感情を離れ、友誼を外にして、公明に觀察判断した處、如上の比較となるので、今夏來歐洲の戦場に於ける實際の成績は明白に此事實を示し、『ガリシヤ』に、『ソナム』に、『ヴェルダン』に、『イソンズ』に、『サロニカ』に、何れの處も聯合軍の實力の優勝を證明してゐるのである。

以上述べた如く、獨逸の大陸軍力は、單に一國を敵とすれば、未だ最優の位置にあるも、聯合の敵に對しては、最早絶對優勢たることが出来ない。爲に戦局の大勢は、本年秋夏の交から轉換し來つて、今日は東西共に守勢を執るの已むを得ざるに至つたので、過去の成功に依り、其戦線を進め、作戰正面を伸張した丈、それ丈、守らざる所なければ、薄からざる所



なしの道理で、今日は却つて各方面共に負擔の重大に苦み、さればとて、内外の人氣に影響する故、引くにも引かれず、驍將ヒンデルブルヒありとも、またマッケンゼン・フォルケンスハインありとも、此後を善くすることには、至極困難であると認められる。若し之が日露戦争以前の如き、兵力運用の餘地ある戦争ならば、又寡を以て衆を破り得る戦略戦術の妙用も出来たであらう。けれども、今度の歐洲大戰の如く、境上一帯、端から端まで、三重四重の塹壕を構へて、之に軍隊の生垣を作り、尙ほ其前に十重二十重と鐵條網を置いて、平押しに押すやうな戦争では、横にも出られず、後にも廻れず、戦術も戦術も施すべき餘地がない。假りにありとすれば、關ヶ原で家康が南宮山の秀秋を立たした如く、潜に中立國等を味方に入れて、敵

の不意を衝かしむる大戦略を施すのであるが、既に弱り目の見えた獨逸側に、今更味方すべき中立國もなく、却て羅馬尼亞は聯合軍に加擔した始末となつたのである。情勢此に至つては、精銳無比と認められた獨逸の大陸軍も、唯必死退守の用を爲すのみで、進攻決勝の餘力なきは言ふまでもないことである。去りとて、之を見て、獨逸陸軍の實力を卑下することは出来ない。其友國強きに非ず、其海軍大なるに非ず、其軍資豊かなるに非ず、而も能く世界の大強數ヶ國を相手取つて、二ヶ年以上の攻撃を續け、まだ自國內に敵軍を入れざること、一に此陸軍の力に據るもので、此點に就ては、敵ながら賞め置かねばならぬと信ずる。

二、英國の海軍力



英國海軍力の絶大なることは、事新らしく言ふ迄もない。昔し英京倫敦に駐劄した普魯亞フレデリック大王の公使が、其實際費の足りない爲め、英國の上流社會に重んぜられぬを慨し、大王に支給の贈與を仰いだ時、大王は、『金服玉車無用なり。英人若し卿を輕んぜば、卿が背後に普魯亞二十萬の驍兵あるを以てすべし』と命じた。公使又之に答へて、『陛下よ、勅命の儀巴里には適應すれども、恐らく倫敦にては無効なるべし。若し英人が之に感應するとせば、我二十萬の大軍は皆潜りて海を渡らざる可からず』と奏聞して、流石のフレデリック大王も、一本參られたさうである。此の昔噺は、今の『カイゼル』陛下が、其海軍大擴張を鼓吹された時、常によく引用されたもので、海島の英國が、優大なる海上武力の擁護の下に終始不

敗の位置に立ち、古來如何なる大戰に遭遇するも、其國土の安泰なる所以を説明せるものである。實に海上武力の消長は、英國存亡の繋る所、其長所ありてこそ、敵の來襲を蒙らないばかりでなく、食糧の大部分を海外に取られる英國々民は、之なくては一ヶ月の中に餓死せねばならぬのである。又此大戰に際しても、英國は依然平時の通りに、其海上貿易を續け、其商船約一千萬噸は御用船に徴發せられ、残り約五分の三の商船の稼ぎ高が、戦前全部の儲けの三倍とは運賃の騰貴に依るとは謂へ、實に意外の現象で、是れ亦海上武力の賜である。以上は單に英國一個に對する其海軍力の消極的作用であるが、更に多大なる其積極的作用を見落してはならぬ。水の續く限り、世界の海洋は何處の果て迄も、此の絶大なる英國海軍の威力に



制壓せられて、獨逸敵國の海上交通は、殆ど絶對に遮斷せられ、大なる意味に於て自然に包圍の形勢を成せること、戦局の地圖を開いて一目瞭然である。加之現に二百萬の英國壯兵が、大陸に渡つて佛軍に加勢せるは、何うして来たか。『サロニカ』より『バルカン』に北進せる聯合軍は、又何處から来たか。嘗て軍需に缺乏して居た露軍が、更に之を何うして得たか。又鐵と石炭に不足せる佛伊諸國が、如何にして其軍需を製造し得るかと詮じ詰めて行くと、其原動力は自國の根據地に蟠居して、坐ながら天下の海上を睥睨せる英國大艦隊の一點に歸納されるのである。

五月三十一日北海大海戦の後、間もなく、自分は此の大艦隊を其根據地に見舞ふた。見渡せば、廣漠たる灣水、大小數百の艦艇に埋もれ、偕ても

雄大、孰れが何か算へも切れぬ。就中二十有餘隻の努級戦艦が、數重の隊列を布けるもの、問はずして是れ大艦隊の中壁と見られ、思はず征客をして、之れなる哉と嘆息せしめた。大戦の後又多少の涙あらんと思ひの外、艦隊將卒の語氣、宛も遊獵より還つたかの如く、濛氣の爲め大獲物を逃したのを惜み、巡洋戦艦其他數隻の損失も、左迄の痛手と思はれざる模様である。夫も其の筈、獨逸の密偵が、其本國に報道せるが如く、英國海軍は一日に一新驅逐艦を増し、三日に一新潜航艇を加へ、一週に一新巡洋艦を作り出しつゝあつて、實際はそれ程ではないが、兎に角、増艦速度の迅速なること、唯だ驚くべき許りである。斯くありては、獨逸の所謂大海艦隊が海上に出動して、何をしようとしても、其力が足らず、北海の決戦も、



一度は試みて極力奮闘して見たが、相手を痛めると同時に、自己の損失が却て多く、結局益々彼我優劣の比例を大にするばかりで、寸效もないのである。

去らば、海中より潜航艇、空中より飛行船と出掛けて見ても、是亦著しい效果もなく、潜航艇の如き、無力の商船は往々其不意打に斃るゝも、軍艦は最早容易に其手に乗らず、却つて聯合軍が四方八方に張り廻した海中鐵條網に懸つて自滅するもの少からず、其失ふ所、急造の數を以て補ひ能はざるは、獨逸總理大臣の告白する通りである。飛行船「ツエツペリン」の倫敦襲撃も、一種の曲技とすれば、多少の見所はあるけれども、唯だ人家を毀し、老幼婦女を傷ける丈けては、軍事上に何等の價値がなく、却つ

て敵の憎惡を増すの不利がある。假りに「ツエツペリン」其物全體が、爆彈となつて落ちて來ても、七つや八つでは、左程の利き目が無からうと考へる。

前述獨逸の陸軍力が既に一方に於ける最大要素たる資格を失ひつゝあるに反し、他方に於て、之に對する英國の海軍力が、依然絶對的優越の首位を占め、終始世界の海上を制御する以上は、假し他の附添要素に多少の消長あるも、此大戰の結果が、終に我が敵國の劣敗となるべきことは、明々白々、寸毫も疑ひを容れぬのである。獨逸の海軍々人は、今や「我に尙ほ十隻の努級戰艦ありたらんには」と言つて居るであらう。なれども、努級戰艦は、小銃や野砲の様に無雜作に出來得るものではない。縦し出來たと



いつても、迎も英國の増艦に追付くべき工業の力がないばかりか、聯合軍は尙ほ佛國にも、日本にも、又伊太利にも、英軍にも加勢し得べき數隻の努級艦が控へて居る。海上は『バルチック』海と『アドリアチック』海の一隅の外、到底獨塊の勝手にならぬのである。

三、英國の財力

故人ビスマルク曰く、『戰爭に三つの要素ありとすれば、其一も金、二も三も金なり』と。自分は此の如き金力萬能論には敬服せぬが、さりとて此度の如き大規模の大戦、各交戦國の日に費す處、三千萬乃至六千萬圓と聞いては、之が金無しに遣切れるとは、我慢にも言へぬのである。數百の艦、之を動かす燃料、數萬の砲煩、其の發する彈丸、數百萬の貔貅、之を

養ふ糧品、皆是金力の生みなせるものと觀じ來ると、矢張り一にも金、二も三も金かも知れぬ。若しそれ巨費を吝まず、中立國に餘れる食糧を買収して、敵人に渡さず。徐に之を餓やして屈し、以て二日早く戰爭の終結を見る事が出来るならば、結局の損失でないと云ふに至つては、金力の作用が、何處迄侵入するか、中々見當の附かない位である。

英國は又此要素に於ても、冠絶の第一位を占めて居る。此戰爭の勃發した時、英國政府は、之に對する何等財政上の準備も用意もなく、英國銀行にある正貨の準備は、僅かに四億萬圓に足らなかつたのである。故に當初は、稍や混雜狼狽の態であつたが、一たび腹を据ゑて資金の回收に掛ると正貨も忽ち七八億に増加し、内債を起せば、數百億の軍資が滾々として集



り來り、第一、第二、第三と回を重ねても、更に其應募に減退の様子がなく、加之一方には、度々の増税を斷行し、所得税の如きは、百圓に付き五十圓以上を取上げられても、格別苦にならぬ如く、兌換制度は、依然確實に履行せられ、今後も尙充分確實と豫想せられる。斯くの如きは英國國民の外、到底他の企て及ばない處で、彼等傳來の信用制度の助けありとは謂へ、本來無い袖の振られるべき道理なく、皆是れ其祖先以來蓄積したる國民個々の富力の致す所で、理財の上手も下手も、あつたものではないかと信ずる。

倫敦駐在森財務官の談に據ると、英國國民全體の富が、約千五百億萬圓又其の年々の所得が、二百五十億、其内二百億は生活費等に消費し、残り

五十億は毎年國富を増加して居つたものである、ところが戦時になつて、却つて其所得が、二百八十億以上に増した許りでなく、生活費約二十億を節約したから、所得の残りが約百億となり、英國國民は、此百億の所得残額で政府の募債に應じ、且つ別に戦時増税約二十億をも納め、開戦後約一年有餘は少しも元金に手を附けず、所得だけで戦費を支辨したものである。然し戦費の次第に増加するに従つて、右の所得だけでは不足なため、海外投資の有價證券を賣却する等の事を爲し、漸次に國富の元金に手を附けかけたけれども、國富千五百億圓の大に比すれば、未だ僅かのものである。米國に投下せる英資約五十億萬圓、本年六月頃の勘定で、其内米人の手に渡つたものが、三十億圓内外と註せられ、其外英國は、尙ほ三百五六十億



萬圓も、海外諸國に投資して居る。此海外投資だけに手を付けても、未だ今後二ヶ年の戦争には耐え得るとの事である。

之を敵國獨逸の困難なる財政現狀と比較して見ると、其等差は、實に顯著なるもので、獨逸の國富は、近年著しく増進して、英國と大差なきに至つたけれども、何分にも、其根柢が未だ固まつて居らぬから、肝腎の融通が利かない。且つ此國所得の三大資源たる、海運も工業貿易も、亦海外出稼も、海上の自由を得ざる爲め、開戦と同時に、忽ち停止の極底に陥り従つて國としての所得が、皆無であるから、當初より國富に手を附くるの已むを得ざるに至つたのである。されば、多少の戦争準備金はありながら開戦勿々、募債もせねばならず、又其募債に應ぜしめたために、戦時貸付銀

行の如き經濟上の大變法をも行ふたのである。原則として、現金とは認め難き有價證券などを、相當の價格に見積つて募債に應ぜしめ、而して無暗に不換紙幣を濫發するのであるから、今や獨逸紙幣の流通は、準備正貨約二十五億マークに對し、百八十億マーク以上に上つて居るやうである。加之其準備正貨の一部は、奥國の帝國銀行より内送した形迹もあつて、其奥國銀行は、其發行紙幣と正貨準備に關する週報の公示を停止して居る。巧妙な遣り繰と云へば夫迄だが、實以て危険千萬、若し償金でも取れなかつたなら、戦後其の整理が付くであらうか。獨逸は戦争前、十數年來、已に増税に増税を重ねて居るから、最早増税の餘力も極めて僅である。それでは多額の軍事公債の利子の支拂、其他戦死者遺族扶助料及廢兵恩給の支給



丈けが出来得るか。數字は明かに其出来得ざるを示して居る。毎回の募債が帳簿丈けの成績を示しても、其内容如何を研究せねば、迂濶に其良否を判断し難いばかりでなく、後の募債で前數回の利子を支拂はねばならぬ様では、償却の見込がない募債を重ねると同様である。自分は全く財政經濟に就ては、素人であるが、獨逸の戰時財政が、其爲せる戰爭の如く、投機的なるかの如く觀察せられ、若し今後尙ほ一年も戰爭が續き、假りに獨逸が負けない迄も、勝つことが出来ないとすれば、其國民の各個は、國家と共に大破産の悲境に陥らねばならぬと考へる。兎に角之は敵方の財政内狀で、其處まで詮索するのは餘計であらう、我々は唯英國財力の尙ほ豊富なるに信賴するを以て足れりと信ずる』

此大戰の三大要素たる獨逸の陸軍力、並に英國の海軍力及び財力の比較が、果して前記の如くなりとせば、其勝敗の數は、最早明白であるが、獨逸諸國も、其處だけ生死存亡の定まる處、今年降るも破滅、明年敗るも破滅と覺悟せば、外交に作戰に、尙も必死の秘術を盡し、萬一を僥倖せんとするは、殆んど必然、未だ之を以て直に安神すべきでない。明日の天氣の知れざると同様、此大戰の將來も如何に變化するか測度し難いと云ふのが本當である。『天下更に大に亂れんとす』の大覺悟あつてこそ、此の戰亂の終局を收拾し、且つ戰後の大勢に順應し得る所以であるかと信ずる。(大正五年十一月歸朝後講演)



## 軍紀の整肅

軍紀の意義——命令には絶対服従、実行には獨斷專決——士氣と軍紀の別——軍紀振肅の七要件——軍紀整肅の方法

軍紀とは軍隊の紀律(Discipline)の意義にして、其整肅とは、下克上に服し、上亦下を信じ、法令確實に遵守せられ、節制嚴正に履行せらるゝを謂ふ。就中其主眼たる要點は各員の其上長に對する服従是れなり。但し此服従は能く上長の意志を體し、之れに添はんとする義心より發するものに



して、無意識の奴隸的盲従と混同す可からず。上長の命令には素より絶對的に服従せざる可からずと雖も、其實行には獨斷專決を要すること多し。服従と專斷とは正に相反するが如くにして、其實は然らず。命令に指示する事項は概ね細末に互らざるのみならず、常に必ずしも未然の情況に適應せるものにあらず。故に其實施に任ずるものは能く臨機處斷して、發令の目的を達成するの手段を選まざる可からず。是れ實に上長の意圖に添ふ所以にして、敢て服従せざるにあらず。情況已に變化せるにも拘らず、依然死令を墨守して其責任を恐るゝが如きは、偶人と相距ること遠からざるなり。此軍紀は軍隊の結合力を保持する唯一の生命にして、之れ無くして、一日も其存立を許さざるのみならず、之れが整否の程度は其實力を消長し

其眞價を高下するものなり。軍紀の整肅せる軍隊は對敵に際し、全軍の意志を一致し、一目的に對し其全力を集中し得るが故に、縦し其方法を過ることあるも、能く諸種の危険に抗し、多大の困苦に耐へ、以て最終の効果を奏することを得。之れに反し軍紀弛廢せるものは、假令其隊制整美にして、隊員の技能優秀なるも、意志の統一なき烏合の兵衆に異る處なく、艱難缺乏に遭遇しては忽ち屈折瓦解するを常とす。

決戦已に我が捷利に歸して、士氣頓に昂り、將に總追撃に移らんとし、或は先を争ひ各自の功名を望み、或は倦疲の極、自己の安息を願ふものある場合に當り、軍紀は勇者をして濫りに進ましめず、怯者をして恣に退かしめず、尙ほ能く全軍の秩序を維して其結合を弛めず、以て有終多大の



戦果を收獲せしむ。又戦闘利ならず、我損害甚だしく、隊制已に亂れて其團結を失ひ、爲に大に戦闘力を減耗せる場合等に於ても、軍紀嚴肅なるときは、須臾にして此悲境より恢復し得れども、其然らざるものは益々崩亂支離滅裂の危殆に陥り、終に又收拾す可からざるに至ること、古來海陸戦の明證する處なり。獨逸近世の兵家『ブルーム』將軍は、士氣と軍紀とを比較して左の如く説けり。

『士氣は兵戦に於て百事を助け、又能く人力を昂起するが故に、極めて貴重なるものなりと雖も、之を維持すること頗る難し、慘烈なる實戦に臨み、絶えず多少の奏功に依りて之を奮勵する能はざれば、反つて容易に冷却し去り、之に屬したる希望は忽ち消滅すべし。戦時長時日の困苦

缺乏に悩み、或は數時間の久しき、爲すなくして敵火の中に伏し、或は又敗戦の後、勝敵に追撃さるゝときは、人心復た昂進の餘地無く、一軍の安危を士氣に委せんとするも得て望む可からざるなり。此の如き場合に際し、能く軍隊の連結を保持し、一旦失ひたる秩序を恢復し得るものは、唯軍紀の力あるのみ。』

士氣は内部の興奮、外部の刺戟等に依り、比較的急激に昂進するも、低落も亦迅速にして、其盛衰の變化凡て一時的なるが故に、到底永久之に信頼すること難し。軍紀心に至りては、長時の慣養に成れる第二の天性たるを以て、身邊の光景、四圍の情況等の爲に容易に消長することなく、一危一難を加ふる毎に益々其強度を高め、能く全軍を鐵石の一塊たらしむ。故



に曰く、士卒上命を畏るゝこと敵より大なるものは必ず勝つ」と、軍紀の振肅せる軍隊には、天地間恐るべきもの無く、向ふ處敵するもの無し。軍紀の軍隊に貴重なる斯くの如く然り。故に我軍の實力を優秀ならしめんと欲せば、第一に軍紀の整肅に力め、他隊の眞價を知らんと欲せば、先づ其整否如何に着眼せざる可からず。然らば如何にして此軍紀の整否を判別し得る乎、其觀察點素より少からずと雖も、先づ其根源に溯り、左記の七件に着眼するを可とす。

- 一、職責を尊重すること。
- 二、任用を公正にすること。
- 三、賞罰を信明にすること。

- 四、指揮を統齊すること。
- 五、法規を厲行すること。
- 六、禮式を確實にすること。
- 七、教練を嚴肅にすること。

此の七件は素より軍事の常經、終始斯くならざる可からざるものにして、特に軍紀を整肅するが爲の手段にあらず。然れども、本來軍紀心なるものは心性に屬し、其一部は自他の分限を悟得せる理性に發し、又一部は上長を畏敬する感情に生ずるものにて、之れが整肅は其發作に過ぎざるを以て彼の技術儀制の如く、之れを教習する方法無く、唯だ此等の常經を履んで長時日の間自然に第二の天性を涵養するの外あらざるものなり。乃ち以



下順を逐うて聊か之を詳説せんとす。

一、職責を尊重すること。

天壤無窮の皇室を奉戴し、世界無二の國體を擁護する我國民殊に軍人は其職責の極めて重大なるを自覺して、切實に其軍職を尊重せざるべからず。夫れ自ら順ふは人の己に従ふ所以なり。軍人は自他の職責を尊重すると同時に他の職責を尊重して、假令下級のものたりとも、漫りに之を犯すべきにあらず。一卒軍門に立ちて之を守るときは、上將と雖も故なくして過ぐるを許さず。是れ實に軍隊をして、各自の職分に忠實ならしむる要訣たるのみならず、軍紀を振肅する上にも亦至大の効果あるものなり。此の自他職責の尊重に就き、特に記すべきことあり、他無し、

軍人の職責は其大小を問はず『神聖にして犯すべからざること』是れなり。抑々帝國守護の大任は、大元帥陛下の保有せらるゝ處にして、其股肱とせらるゝ各級軍人には、其階級に準ひ、之が幾分を擔當せしめらる。故に一卒警門の小職も、亦此の大元帥天職の一小分子を成し、之に伴ふ其職權も亦大權の一部にして、其職責には素より大小あるも、其尊嚴には毫厘の輕重あるものにあらず。職責の尊重せざる可らざる原由正に此に存せり。若し夫れ各級の軍人常に此根本的大思想を心底に銘記するときは、其職務上の言動、自然に眞正の尊嚴を具有し、下に對しては效へずして其敬服を得、上に對しては求めずして其信頼を受け、全軍の軍紀自ら整肅すべし。



二、任用を公正にすること。

夫れ將官より下士に至るまで、苟くも兵衆を指揮統率するもの、各其職に適し、其任に合ふときは、其部下自ら之に信服して、其命令確實に行はれ、軍紀自然に成立するものにて、所謂適當の人物をして適當の位置にあらしむるは、軍紀を整肅にする第一要義なりとす、故に軍隊の人事行政に於て、職員之任用即ち其進級、轉補、任免、黜陟等の公正を保持し、常に適材を適所に置くは、至重至大の要務にして、若し此根本の公正を缺くときは、如何なる他の方法を以てするも、真正の軍紀を整肅すること、殆んど得て望む可からず。彼の平時の甲板若くは練兵場に於ける外觀の畏服の如きは、未だ以て死生の戦場に於ける衷心の信服を示

しものに非ず。偽善虚勢は死神近づくに従ひ、漸次に其覆面を剝脱さるゝものなり。而して公正に人を任用するには、宜しく左の四事を計査し其調和均衡を得せしめざる可らず。

- 一、經歷
- 二、徳望
- 三、功績
- 四、技能

此の四者は、人の心服を得せしむべき士人の資格にして、之を具備するものを上乘とし、其一部に長ずるも、他に缺くるものは、未だ以て人を率ゐしむるに足らず。故に、唯だ功績の著大なると、技能の優秀なる等に依り、經歷、徳望の之に伴はざるものを拔擢進級せしむるか如きは、全隊の結合を固くし、其實力を増加する所以にあらざるなり。

三、賞罰を信明にすること。



孫子曰く『卒未三親附而罰之則不服。卒已親附而罰不行則不可用也。』と賞罰は已に軍紀の整肅せる軍隊の獎勵制裁にして、獨り怯夫を立たしめ、勇士を進ましむる直接手段たるのみならず、又上長の威信を確立して、軍紀を維持する間接手段たるものなり。而して之が實效を奏するは、其信且つ明なるに存し、所謂信賞必罰は論功治罪の大原則にして、賞は小を洩さず罰は大を許さざるを行賞處罰の最要訣とす。若し夫れ賞すべきを賞せず、罰すべきを罰せざるときは、軍紀是より弛廢し士氣忽ち衰退すべく、又賞すべからざることを賞し、罰すべからざることを罰するときは、上威爲に墜落し、將命も漸く行はれざるに至るべし。況んや賞すべきを罰し、罰すべきを賞するに於ては、軍隊の害毒是より大なるはなし。故に、賞罰の爭必ず公義に準據し、決して私情に拘泥す可らず。唯其法律の適用に於て、寬嚴の取捨は一に之を司どるもの、常識にあるのみ。昔楠正成は、陣中の風紀を亂したるの故を以て、其愛姪和田新三郎を刑し、諸葛亮は作戰の節度に違ひたる科を以て、子の如くしたる馬謖を斬れり。千早の孤城七百の寡兵を以て、天下の大軍に對抗し益州疲弊の後を襲けて、天時地利を占めたる魏吳と鼎立し得たるもの、豈獨り一將用兵の妙技を以て能くすべき處ならんや。必ずや楠軍の紀律常に侵す可らず、蜀兵の節制終始亂れざるもの有りしが爲めにして、而かも其原因、主將賞罰の信明なるに存せり。史を讀む者能く成敗利鈍の果を觀て其因を尋ねざる可らず。



## 四、指揮を統齊すること。

凡そ軍隊の團結を固くし、宛たかも一身の如くならしむるには、必ず之を指揮の下に統率せざる可らず。指揮の基點二個以上に分立するときは部下其適從に迷ひて其意志を混惑し、爲に軍紀の基礎を揺がす。然れども、直接一指揮の下に運用され得る兵力には、自ら其限度あるを以て、若干の單位を集團して團隊となすが如く、順次に其組織を大にし、各級の團隊には、之に相當する指揮官を置き、以て全軍の指揮を統一す。編制とは即ち是なり。故に、國軍は大元帥の一指揮を仰ぎ、艦隊は司令長官の一令に服す、一艦は艦長の一心に動き、一分隊は其分隊長の指導に従ふ。即ち將官より士卒に至る迄、凡そ軍人たるものは、決して二人

の首長を戴くべからざるものなり。指揮は斯く統一さるゝと同時に、又上下各部を通じ、其系統に據りて齊一行はれざる可らず。例へば一聯隊には全隊の指揮あると共に各隊の指揮ありて、特別非常の場合の外は必ず其系統を経由するを要し聯隊長が大隊長を措いて、直ちに自ら大隊員に號令するが如きことある可らず。斯くの如きは一時の便宜なきにあらざるも、其軍紀上に悪影響を及ぼし、隊員は聯隊長に心服するも、其直屬大隊長を畏敬せざるが如き局部の麻痺を生じ、全隊の軍紀を不具たらしむるものなり。昔、『ナポレオン』の麾下に常勝軍と賞讃されたる佛兵が、其人の去ると共に不能律の烏合と化せしも、亦此の局部軍紀の缺乏より來れるものにして、若し此に鑑みるときは、帝國の軍隊は其大小



に論なく、常に克く其指揮を統齎し、主長斃るゝも次長其指揮を繼承し將校皆盡れば下士之に代り、最後の一兵に至る迄、終始嚴肅なる軍紀の下に奮闘し得るが如く養成し置かざる可らず。

五、法規を勵行すること。

軍隊の法規に種々ありと雖も、要するに全軍に普遍せる永久的命令に外ならず。故に之を遵守するは、尙ほ上命に服従すると同一なること言を俟たず。然れども其履行實施に至りては、人に依りて自ら寛嚴の差別を生じ、爲に自他の軍紀に相影響することあり。例へば茲に二艦ありて、寛大なる甲艦長は上陸規則の範圍内に於て、比較的多數の下士卒に上陸を許し、一時其部下の悦服を得ることあるも、嚴正に上陸規則を勵行せ

る乙艦の下士卒は、他艦と對比して其艦長に對し不滿の感情を抱き、爲に其上下の和氣を傷つることあり。加之、甲艦に於ても會々他の嚴正なる艦長代り來るときは、乙艦と同一の惡果を見るべし。故に法規は異常權變の場合の外は、全軍に通じて終始一様に勵行さるゝを必要とし單に自己と現在とを小觀して、其寛嚴を斟酌すべきものにあらず。況や寛嚴に對する反應も、唯之れ一時の感情に過ぎずして、寛も慣るれば悦服を買ふに足らず、嚴も久しければ怨嗟を減ずるに至るものにて、要は一に勵行を以て恒久不變の慣性を養成するにあり。

六、禮式を確實にすること。

夫れ禮は心性の天真に發源せる人倫の大道にして、軍隊の軍紀も亦實に



其一部に屬せり。去れば、聖諭の五ヶ條にも、第一の忠節に次ぐに禮儀の尙ぶべきを以てせられ、其重んずべき程度は武人の本領たる武勇にも勝るものと奉察せらる、若し軍人たるもの能く禮の何物たるを悟得し、常に之を體して躬行實踐するときは、又軍紀を説くの必要あらざるなり。禮儀とは即ち此内心の禮意が外容の形式に發露したるものにして素より禮の本體にあらず。其内に誠なくして、徒に其外を治むるも、神人共に納受するの理なし、左はあれ。此の外容の形式と雖も、常に之を確實に履行するときは、形又自ら心を内化し、内外相須て漸次に誠の眞禮に徹底するに至るものにて、啓蒙の捷法は、初めより中心を匡さずして、外面より感化を及ばすにあり。新たに浴して淨衣を着せば、心氣自

ら清快なるを覺ゆ、豈外形の内心を化せざることあらんや。人を率ゐる者敬禮の虛實に拘らず先づ其形式を履行せしむるを可とす。

七、教練を嚴肅にすること。

嚴肅なる教練は、常に其教科の發達に直接の效果大なるのみならず、又間接に軍紀心を涵養する最簡の方便なり。一舉一動苟も私念を以てせず、唯命之れ従ふ軍紀的眞相は教練の間に實現す。彼の新募の生兵が、入團後月餘にして、已に軍人の品格を具有するに至るは、正しく銃隊教練の慣化にあらずや、加之、教科其物の發達も、軍紀之に伴はざれば實際に臨み殆んど何等の效用を爲さざるものにて、例へば火災に當り、能く一艦を危機に救ふものは、唧筒動作の遲速、蛇管吐水の多少等より



も、寧ろ一令の下に火中に闖入し、或は焼床に立つて守所を去らざる如き艦員の軍紀心なり。平素軍紀を度外せる防火教練は小兒の水戯に等しく、到底猛火を鎮むるの豫行とするに足らず。然らば即ち教練を嚴肅ならしむる方法如何、曰く、各階級の指揮官能く其態度と號令とを嚴正にし、終始其部下の動機を掌握して、苟も合なくして漫りに動作せしめざるにあり。

軍紀整肅の方法は大要前段に列敘したるが如し。人に長たる者常に此に着想するときは、日常執務の間、軍紀を振作するの機會多々あるを發見すべし。斯くして、其部下悉く心服し、一心同體の如くなるに至り、初めて共に堅陣を衝き死地に入るに足るなり。而して尙ほ此軍紀に調和すべき貴重なる配劑あり。

他なし、戰友の信愛是れなり。軍紀能く外を結合すと雖も、内に友愛の連鎖なきときは、其團結未だ極致とは謂ひ難し。相共に軍籍に入り、一は首長となりて指揮を司り、一は配下となりて隸屬すと雖も、元是れ同胞の臣民にして、君國に盡すべき誠意に差等あることなく、唯賦與されたる職權の大小に基き、軍紀其間を媒介して、上下の關係を形成せるに過ぎず。若し軍に軍紀のみに據るときは、軍隊の結合は無味乾燥に過ぎ、和氣消滅して全く其粘着性を失ふ。友愛の調和又無からざるべからざるなり。左はあれ、親愛に過ぐるも亦不可なるものにて、爲めに情實の纏綿に窮し、是非の決斷に苦しむことあり。之を卑近に例へんに、軍紀のみに團結せる軍隊は恰も石の如く、硬堅比なしと雖も、時に衝擊に遭ひて破碎の虞あり。



之に反して友愛のみを以て親和せる軍隊は鉛の如くにして、屈伸自在なるも、一塊として用ふるには柔軟に過ぎたり。若し恰好理想の軍隊は、此兩者の中庸を得たる鐵の如きものにして、所謂恩威並び行はれ、敬愛相狃れざるもの即ち之れなり。

明治天皇陛下聖諭の五ヶ條にも、第二に上下の禮儀を誨へらるゝと同時に、第四に戰友の信義を諭さる、是れ吾人の拳々服膺せざる可からざる處なり。(大正二年二月軍事講義)

## 歐洲大戰と工業

機械力七分人力三分の戦争——夫婦共稼の戦争——工業經營上の進歩——歐米の工業技術上の發達——鍛鐵術——電氣爐に付いて——戦時の工業

今次の歐洲大戰の實況を視るに、海戦は勿論陸戦に於ても、機械の力が七分通りを働き、人間の力は残りの三分位のもので、寧ろ人間が機械に使役されてるかの觀がある。

海戦の要素が、主として機力たるは、今更言ふまでもないことにて、砲熯



水雷、探照燈などが、已に機械たるのみならず、之を裝載せる軍艦、驅逐艦、潜水艇其物が、大なる意味に於ける兵器で、其動くも走るも、攻むるも防ぐも、一として機力に依らざるものはなく、其相對抗する戦闘距離も今日は早や十海里以上に延長し、例へば一方は東京、片方は横濱に足場を構へて相戦うて居るやうなものである。故に直接肉眼を以て、敵の艦影を認め難く、唯だ機械の力で、敵の位置や距離を測定し、機械的に大砲、水雷を發射しつゝ、戦うて居るかと思ふと、潜水艇は水中より間近く潜り來りて、音沙汰なしに、不意打を喰はすといふやうな有様である。去れば、晴れの戦場に於ける甲板上の勇士は、較や張り合の無い譯であるが、之れか人智の發達に伴ふ事物の進化であるから、致し方ないのである。

陸戦の方は、日露戦争の當時迄、未だ人力が主要の部分を働いたが、之れも今日は海軍同様に機力的に變化するやうになつた。小銃、野砲は勿論機關銃、野戦重砲、榴彈砲、塹壕砲等の如き直接の破壊兵器が皆機械的たるのみか、塹壕を掘る開鑿機も、地雷の坑道を穿つ鑿岩機も亦機械で、塹壕などは一時間に一哩も掘れ、今は一時間に三哩も掘る機械が出来たさうだ。故に鐵條網で固めた十數線の塹壕を、無數の重砲彈で地均らしつゝ、攻撃前進する間に、早や其前に新塹壕を設けて防禦されるのであるから、敵味方共に攻撃の抄取らないのも無理は無いのである。又戦線附近の軍隊輸送、其他重砲、糧秣等の運搬は、大部分自動車機力に依れるもので、之れなくては今度のやうな大陸戦をすることは出来ない。獨逸軍が、當初破



竹の勢を以て、白耳義より佛國に進入し、將に巴里も危くなつたとき、巴里の防禦軍團が數萬の徵發自動車に分乘して、獨軍の右翼に迂廻し、其側背を脅威攻撃したから、遂に彼の『マルヌ』の退敗となつたのであるが、若し當時巴里に徵發さるべき自動車が無かつたならば、佛軍の此の作戦は出来なかつた譯である。又獨逸軍が約八ヶ月間數十萬の犠牲を拂ひて、其奪取に執着した『ヴェルダン』要塞が、遂に能く持ち耐へたのも、一つは自動車功で、當時『ヴェルダン』に通ずる二線の鐵道は敵彈に破壊せられ、佛軍の増援、軍需の補給等は悉く後方十數哩の一村落より交通せる、一萬有餘の自動車に依つたものである。斯く云ふと、歐洲の如き道路の善き戦地には、自動車も其效用あれども、沼地や泥野には用に立たぬといふ人も

あらうが、そんな處には一里でも二里でも、板を敷て自由に自動車を通はして居る。將又、敵情偵察や彈着觀察に最早や無くてはならぬ飛行機も、其全體が機械で、佛軍の強いのも一つは其優勢なる飛行機を以て、能く敵情を知り、且つ重砲の効果を發揮し得らるゝからである。其他英軍が始めて戰場に持出し、獨軍に一驚を喫せしめた鐵甲車も、全く機械の應用で、英人が之を陸上の弩級戰艦と稱するのも當然である。

斯く海陸軍の所謂戰鬥力なるものゝ、力の出所を詮索して見ると、前述べた通り、其七分は機械の力で、之を三分の人力で使つて居るのである。即ち大部分は機械の戦争である。又其機械を運轉して居る原動力より云へば、石油の戦争である。更に其機械は如何にして製作されたかと云へば、



皆内地工業の生み出せるもので、此點より見れば工業の戦争と云はねばならぬ。而して其工業は人間の營めるものだから、結局は矢張り人力の戦争となるのであるが、従前の如く戦場に立つて、外で働くものゝみならず、内で兵器彈藥等を作り出すものが、却つて重要な、間接の戦闘員となるのである。現に英佛諸國等に於ける實狀を見るに、十七八歳より五十六七歳迄の男子は、大抵皆國民兵となりて、戦場に出掛け各軍需工場に於ける男工の不足は、數多の女職工が之に代りて、随分烈しき力業をなし、老人や小供は其製作品の荷造りや積み出しをして居る。即ち女房や娘の作つた彈藥で、其亭主や兄が敵と戦うて居るので、今日は戦争までが、夫婦親子の共稼ぎとなり、敵に對し直接間接の相違はあるが、真正なる國民皆兵

主義が自然に實現されて居る。我國も他日此の如き戦禍の遭遇したら、矢張り此の通りに男女老幼を問はず、舉國皆兵で遣るより外はないのであるが、如何せん現在の如き工業の程度では、人間はあつても、道具が揃はずして、人口六千萬の内大半は、戦争の用を爲さず、唯餘計の心配をして見て居るの外ないであらう。英國の如き民間の工業が彼の通り發達して居つた處で、出來得るだけの工業動員を行つてすら、尙ほ不足を感じて、新規に増築や擴張を斷行し、戦前の工業力の三四倍にもした位である。此の如き大規模の戦争に對し、我國現在の官立海陸軍の工廠だけでは、其軍需の十分の一位を充たすのみで、多少平時の準備があつたとしても、半年以上を支へることは覺束ない。自分は此の點より見て、切實に我が民間工



業の發達を希望して止まないものである。然し、唯其必要を勸むるばかりでは、聊か無責任であるから、以下少しく専門に立入り、兵器に最も關係ある鐵工業の進歩現狀等に就き、其道の方々の参考ともなるべき一二の事項を述べて置かうと思ふ。

歐米諸國各種工業の經營方法は、勞銀の漸騰と製品の競争とに伴ひ、近年に至り、大分進歩したが、殊に此戦時に入りて、餘程其模様が變つて來たやうである。是れ主として、從來の手慣れた職工が軍隊に徴集せられ、其代りに年少の見習や女工などを使役することゝなつたからでもあるが、又一面に於て、工作機械が進歩して、職工の熟練に須つよりは機械其物の精巧に依り、製作品の仕上を均一にし、其の製造額を増加せんとするに至

つたからである。自分は歐米諸國の各種製造所を随分澤山見たが、特に最も目に着いたのは『ゲージ(度計)』と『ジグ(當て型)』の應用が著しく進歩したること、米國式の自動工作機械の増加したことである。『ゲージ』と云ひ『ジグ』と云ひ、手加減の熟練に依らず、機械的に製作の寸法を整一にせしむるもので、之を以て作業すれば、臨時雇ひの職工でも、相當の仕事が出来る譯である。又自動機械は、機械其物が仕事をするものであるから、職工の手を省き、且つ其熟練を要しないが、我國の如く、未だ職工の勞銀が安く、且つ製品の需要が比較的少い處では、果して之れのみ依るが、經濟であるかないかは疑問である。兎に角『ゲージ』や『ジグ』は勿論、自動機械の應用を弛めて置くことは、必要に臨んで、其事業を擴張するのに、



最も都合宜しく、職工の熟練のみに重きを置くと、有事の際俄に其製造量を倍加せよといふ注文があつても、之れに應ずることは出来ない。之れと同時に、『ツール(工具)工場』の整備も亦至極必要で、現時の歐米諸製造所は、大抵皆な『ツール工場』が最も能く整頓し、廣大なる場面を之に充て、優良なる職工を配置して、工具を鋭利ならしむることに注意して居る。如何なる機械工業も其の道具が揃はなければ、完全の製作の出来ぬのは、言ふまでもないことで、殊に自動機械を使用するには、その『ツール』の取り代へを潤澤にして置かぬと、その效用を發揮せしむることが出来ないのである。

又新參の見習や女工を、如何にして機械に慣らして使役し居るかといふと、決して之れに多技の仕事を教へず、單に一種の機械で一つの業を授けるばかりで、當初の一週間は其機械の取扱方、其運轉の速度、或は地金の如何に依り、之を削るに用ふる油又は石鹼水の使用心得などを教へ込みそれより直に本業に移し、一ヶ月の後には合格製品を作り得るやうになるさうである。然も、其平均成績が従來の職工よりも良好であるといふことは、大に注意すべきことで、我國一般の職工は融通の效くやうに、兎角多技に従事することを好み、且つ使ひ慣れた機械になづんだ守癖があつて、新規の機械を無闇にけなす悪風があるが、之等は職工の手腕にのみ重きを置くより生ずる弊害で、能く歐米の現狀に鑑みて、之を矯正して置かんと戦後の工業競争に不覺を取るのみか、眞逆の時に機械と人手を増加して、



急に多量の製品を得んとする場合に、非常の困難を感ずること必然である  
と信ずる。

鐵工業の技術上の發達現狀に就ては、色々目新しいものもあつて、近年  
大に發達したる『スタンピング(型打)』も、次第に大型のものに及ぼされ、  
又電氣『ウエルデンク』の如きも、餘程廣く利用さるるやうに觀察された。  
就中、自分が我國工業の現狀に比較し、最も深く感じたことは、地金の加  
熱法(ヒート、トリートメント)が著しく進歩したことである。各種の金  
屬工業に於て、此の加熱法の必要なるは、今更云ふまでもないことで、如  
何に兵器や器械などの專賣の形式又は特許の意匠も、亦其地金の合金配合  
等も、悉く分明して居ても、肝心な其地金の熔解熱度、冷却熱度、鍛練

熱度或は焼入れ、焼鈍までの熱度などが、精確に分らなければ、假し形状  
けの眞似は出來ても、其強味を持たず譯には行かない。例へば簡單なる錠  
前を作るに其形も地金も、舶來品と同一であるが、其焼入れの方法が適當  
でないから、和製品は往々折れたり、山が崩れて聞かなくなるのである。  
即ち此の肝心な加熱年度の加減が、一般に手を入れるやうにならねば我國  
の工業品は到底歐米の工業品と競走することは出來ない。而かも、此の加  
熱度の加減は大抵秘密にせられ、專賣の形式、特許の意匠又は地金の配合  
迄は買へば教へてくれるが、此の熱度だけは中々教へてもくれず、又教へ  
られても其呼吸や加減が容易に會得されないのである。故に我國の工業  
家は、是迄のやうに。一々歐米に模倣するを斷念し、自ら進んで發明創始



するに努むるより外ないのである。尙ほ此の加熱法に就いて、較や技術家の領分に立入るの嫌あれども、自分が歐米巡回中に見聞した處を左に略述して置かうと思ふ。

凡そ鐵又は鋼に熱度を加ふる時、或る熱度に達して第一吸熱點あるを發見し、更により以上の熱度に上りて第二吸熱點あることが發見せられ（此の吸熱點は炭素の含量、合金の配合量等に依り種々に變化す）其第一吸熱點以下を  $\alpha$  鐵と稱し、第一吸熱點と第二吸熱點との間を  $\beta$  鐵と稱し、第二吸熱點以上のものを  $\gamma$  鐵と謂ひ、此の加熱の各階級に於て、鐵の分子組織及び其性質に格段の差異あると已に斯界に周知せらるゝ處である。現下歐米鐵界の實驗に依れば、如何なる鐵を鍛練し焼入れし又は焼鈍ますにも、前記加熱度の  $\beta$  鐵の情態に

なるときに於てせねば、其効果が少いのみならず、優良なる合金鋼などは効果皆無にして、却て鐵質を變化し有害なるものである。故に従來『セメントーション』と稱して、鐵を  $\gamma$  鐵迄に加熱し炭素を吸収せしめて（ $\alpha$  鐵の時は炭素を吸収せるも、 $\gamma$  に移れば、然料より炭素其他の不純物を吸収す）焼入れをなすが如きことは、鐵質を脆弱ならしむるものとして漸く排斥されんとするの傾向が見える。又鑄鐵工業をなすにも、先づ鑄型を適當の態度に温め置き、鑄鐵を冷却せしむるとき、其冷却を  $\beta$  鐵の熱度に保ち、其後直に大氣の常温に觸れしめず、極めて徐々に冷却せしむるの必要が認められ、斯くした鑄物は『チルド』するの惧れ少く、又『アンニール』の必要もなく殆んど鍛練したる物に等しき強度を有するさうである。



兎に角、鐵の加熱冶金法が、前記β鐵のときに於てするを必要とするは、殆んど定論となつたやうで、鐵工業に従事するものは、大に此に留意せねばならぬ次第である。而して鐵が幾何の熱度でβ鐵になるかは、鐵其物の炭素の含有量、合金の配合量等に依り、一々異つて居るから、其試験片を取り「レコーヂング、バイロメーター」(指記測熱量)を以て、一々測定せねばならぬので、其測定法に就いても多少の心得を要するのである。自分が非専門にも拘らず、之れ迄立入つて言ふたのは、則ち此の「バイロメーター」の應用を我が工業界に普及せしめたい爲めて、歐米の諸工場では、職工に至るまで已に「バイロメーター」の應用に習熟し居るに拘らず、我國では技師ですら、未だ「バイロメーター」の使用に慣れぬものが多く、地金の種類を

問はず、從來の通り、手加減や目加減だけで冶金して居ては、假し最後に相應の良績を得るとしても、それに達する迄に度々の失敗を重ね、無益の時間と費用とを擲たねばならぬ譯である。「バイロメーター」も近年は餘程改良せられ、種々なる形式のものが市場に販賣せられ、之れを使用する方法も左程六ヶ敷ものでないのであるから、我工業家は此點に於て一般の努力と研究を進めて貰ひたいと思ふ。又此研究が進まなければ、如何程形式や意匠の眞似が出来ても、到底眞面目な工業の基礎は確立するものでないと思ふ。

金屬工業に付、尙ほ一言し置きたきは、近時著しく發達し來りたる電氣爐のことである。我國では未だ其實用經驗が少いから、或は取扱ひが困



難とか、或は經濟にならぬなど、云ふ人があるが、自分の見た處では決してさうでない。英國『セツフィールド』の如き、石炭は極めて廉價で、電流は一『キロワット』約七錢もする處ですら、殊に電氣嫌ひの英國工業家が、今日は随分多く電氣爐を使用して居る。伊太利、瑞典の如き石炭に乏しき國では、製鋼にも亦製鐵にも、電氣爐が益々増加し來り、特に電氣好きの米國に行つて見ると、至る處の大小鐵工所、殆んど電氣爐を見ざることもなしといふ有様で『イリノイス』製鋼所の如きは、已に三十噸の大電氣爐を据付て大製鋼を始めんとして居る。素より斯く電氣爐の増加したのは、歐洲大戰のため、軍需品の製造が忙しく、高熱を要する『ニッケル』鋼や『クローム』鋼の屑金を熔かすに用ひ、或は『フェロー、シリコン』『フェロー、

マンガ』『フェロー、タングステン』、又は『フェロー、モリムデン』の如き、製鋼原料を作るに用ゐられてあるが、又製鋼製鐵の本業たる、各種合金鋼の製造、其他優良鉄鐵の製造にも應用されて居る。元來電氣爐の長所は

- 一、熱度高きため、原料の熔融を完全にし、且つ不純物の排除を能くすること。
  - 二、電氣を用ふるため、燃料よりする燐、硫黄の如き不純物が原料に混入するを防止すること。
  - 三、電流作用のため、原料の熔液を能く混和すること。
- で、此の三利點に對しては、從來の『ベセマー』式轉爐や『シーメンズ』式平



爐の到底及ばざる處で、坩堝爐と雖も、前記第三の利點に於て劣れるのである。故に近頃米國では『ダブルレファイニング』又は『トリプル、レファイニング』と稱して、先づ『ベセマー』爐若しく『シーメンズ』爐にて熔解したる熔鐵を直ちに電氣爐に移して、精練を重ねる方法をも遣つて居る。蓋し從來電氣爐の不利不便と認められたる點は、其容積小量にして大型の『インゴット』を得難きこと、石炭燃料に比し、營業上不經濟なることにありしも、今日は已に二十五噸三十噸の電氣爐が實用せられ、特に五十噸爐の出来るもの近きにあるべく、又經濟上より見て、自動装置で其電氣杆を調整して、常に爐内の熱度を一定に保ち、且つ最も損じ易き爐蓋の冷却法を施し而して、其操作に熟練すれば、其品の純良なるより却つて經濟にな

るといふことである。殊に上等の地金を以て強度の大鑄物などをするには熱度と容積の關係上、此電氣爐を利用するの外他は方法は無いのである。又彼の高價なる木炭銑鐵の如きも、廉價なる水力電氣を起し、電氣爐で製造する方法が、燃料の不純物混入を避くる點などより見て、比較的有利であると信ずる。而も此の電氣爐の構造は誠に簡單なもので、一二噸の小なるものは一二ヶ月、二三十噸のものも半年あれば澤山である。唯だ茲に少困難なるは、其高熱に耐ふべき爐内の耐火煉瓦を得ることであるが、電氣爐の耐火煉瓦は、酸化『アルミニウム』又は『マグネサイド』煉瓦を最良とすれども、若しこれに乏しければ『ドロアイト』煉瓦にても、非常の高熱を用ひざる限り、充分實用に耐へるのである。又右の酸化『アルミニウム』



及『マグネサイト』煉瓦も、我國にある原料を以て作り得らるゝのである。兎に角、近時高熱度の使用に依り、製鐵製鋼の技術が進歩しつゝあることは、既知の事實で、其高熱度は電氣爐に依るの外之を得るに途なく、従つて電氣爐が將來の製鐵製鋼工業に重用せらるべきことは必然の趨勢である殊に我國の如く、比較的廉價の水力電氣を得る今日、電氣的に工業の發達を圖るは、寧ろ自然に順應するものではないかと考へる。

戰爭最中の歐洲諸國及米國等の工業を觀察して、自分の感得したる概要は、先づ前述の通りである。尙ほ軍需に關係するものにて、火藥の原料たる石炭酸、硝酸、グリスリン等のことに就き話したきともあるが、茲には單に鐵工業に關する事丈けに止め置かうと思ふ。

要するに、斯く長年月の大戦亂に際會しては、如何なる軍團といへども、平時常備したる、一通りの陸海軍位では、僅かに當初半年足らずの用を辯ずるのみで、漸次之を増勢補充し得る、國內工業の基礎が確立して居らぬと、到底之れに耐へ得べきものではない。其工業も原料の生産より、其第一加工、第二第三加工を経て、完成迄の各分業が、凡て整うて居らぬと、畢竟不具で、例へば軍用絨の製造の如き、其の原料の羊毛收穫より、第一加工の『トップ』製造、第二第三加工の毛糸、染附、及毛織の各分業が揃はねば、羅紗にならぬものである。我が國は交戦國でありながら、幸に戦禍の中心より遠ざかれるため、今日の如く吞氣で済むのであるか、若し他日禍心が東亞に移り來たら如何にするか、其時萬一海上が優勢なる敵



艦隊に利有せられ、製鐵の原鐵が支那から來らず、硝酸の原料たる硝石が智利より、送れず、其他「ニッケル」、鉛、「アルミニウム」、皮革、綿花、石炭酸、グリズリン等の軍需原料が海外より輸入されず、又輸入されても之れに加工することが出来ぬとしたら、幾何の勇將猛卒があつても、完全に國防の任務を盡すことは不可能である。此の戰亂の將來と、戦後の趨勢を察して真切に之れを思へば、實に薄氷の上にいるかの如き感じがするのである。國防の時務は決して軍人の專業でない、國民悉く之れに任せねばならぬので、特に工業家は此點に深く留意して貫はねばならぬと信ずる加之、平和的國力發展の見地よりしても、工業の振興は無論望まじき處で、彼の裏石、水鏡、滿俺などが、原鐵の儘安く外國に輸出せられ、それ

で作つた地金が又高く内地に輸入さるゝ様な、馬鹿げた事を遣つてゐては國力の發展は何時迄も前途遠遠である、今や海外工業品輸入減少し、我國に工業獨立の必要を促すると同時に、其經營に要する資力の餘裕を生ぜしめ、而も歐米諸工業國は、此戦時は勿論、戦後二三年の間、其勞銀、税金及び運賃の昂騰に制せられ、少くも東洋及南洋方面に於て、我が工業に對抗し難き境遇にあるものと觀察せらるゝのである。是れ實に我が工業振興のため、千載一遇の好機で、若し此機會に我が工業の基礎確立せざれば、我國は未來永劫工業國たることは覺束ないと信ずる。況や、國防上より工業力充實の必要を覺らば、國家と運命を共にすべき國民各個が、儲かるから遣る儲からぬから遣らぬなど、言うてる時に非ざるに於てをや。(大正五



## 米國海軍の大擴張

米國海軍大擴張の眞意——米國海軍の擴張案——新造艦隊の設備——黄色紙の日本  
來寇説

歐洲の強弱諸國が、各其全力を擧げて、慘澹たる交戦に忙殺されある間に、西半球の局外に中立して獨り平和を享樂しつゝある、北米合衆國が咄嗟に軍備の大擴張を決定したることは、何等か別に爲さんとする處あるかの如くなれども、凡そ現時の世界に國するものが、其軍備を充實して國權を維持し國利を伸張せんとするに、別段の不思議はないのである。米國が



其の軍備、特に其海軍を擴張せんとせるは、決して今更の問題ではなく故マハン少將の如き先覺者は已に數十年來之れを唱道して息まざりしもので今次之れが實行を見るに至りたる動機は言ふ迄もなく歐洲の大戦其物である。米國國民は昨年來潜水艇の商船撃沈問題に就き獨逸との數次の交渉に際し、痛く自己の國際的威力の不十分なるに刺戟されたと同時に彼の英國海軍が絶大の勢力を以て海上を制し戰時に於ても能く其海外貿易及海上交通を維持し、尙進んで其敵國を包圍状態に孤立せしめ、陸上攻戰の原動力たるを認め深く自國國防の實力如何を省るに至り海軍擴張せざる可らず陸軍常備せざる可からざるの絶叫は一時に國民の輿論となり、忽ち秋火の勢ひを以て合衆全國を風靡し、終に海軍當局の提出せる増艦計畫を小なり

とし一層膨脹せる大計畫となつて最近の議會を通過したること周く世人の知れる通りである。

今此に至る迄の米國諸名士の所論の要領を摘記せんに

一、海軍軍備調査委員長ワイズ・ワード氏は曰く「米國は敵の來攻に對し其兩洋海岸、巴奈馬運河及海外領土を防衛し且西半球にモンロー主義を強行し世界の公海に我が權利を保護する爲め十分なる陸海軍の兵備を必要とす。而して之が實行の手段として先づ急速に海軍力を擴張し曾てありたる世界第二の大海軍國たらざる可らざると同時に又陸軍を強大にし假想敵國の大陸軍が我領土を侵すに備へざる可らず。」

一、外交調査委員長上院議員ストーン氏曰く「余は米國商船の雄大なる發



達を見んと欲するのみならず、之に伴ふて我海軍の大擴張を熱望して息まざる者なり。米國にして強大なる海軍を有せば大なる陸軍は必ずしも之を要せず、若し敵國の軍艦が二十五哩の射程ある砲を以てせば我は三十哩の射程ある海岸砲を具へ、強大なる海軍と協力せば何ぞ恐るゝに足らん。

一、共和黨の領袖ルーズベルト氏曰く『先づ第一に吾人は雄大周致なる海軍擴張を決行し急速に世界第二の海軍國たらざる可らず。第二に陸軍參謀本部をして米國現下の國防状態を腹藏なく披瀝せしめ吾々國民は十分之を熟知し居らざる可らず』又曰く『現下歐洲大戰の實況を観察するに英國の大艦隊が自國の港灣に根據して居ながら世界の海上を制壓し以て自

國を防衛すると同時に敵國を包圍し戦はずして敵を屈しつゝあるは洵に感嘆に堪へず、斯くの如き偉大なる不動の現象は有史以來未だ曾て見ざる處なり。

(附言) 流石は此人能く英國艦隊の腹藝を看破し居れり。

一、海軍軍事本部の決議に曰く『今次歐洲大戰の經過は、本部をして、我海軍の勢力に就き抱懷せし意見を變更せしめたり。即ち開戦の當初より、全然海上を制壓するの必要は、東西二大洋に面する米國に取り最も切實なるを認む。夫れ海軍は單に沿岸に於て、敵の來攻を防禦するを以て足れりとせず、遠き洋心に敵を求めて之を撃破し、以て我海上貿易を保護し海外交通を維持せざる可らず。惟ふに米國現在の海軍力は平時に



於て外交上の主張を貫徹する能はざる耳ならず、戦時に際し交戦の目的を達成するに足らず世上或は此の大戦の教訓として潜航艇萬能を唱ふる者あるも之れ實に淺薄なる素人論に過ぎず英佛諸國は已に敵の潜航襲撃より其軍艦を保護し得たると共に將に其商船をも保護するに成功せんとしつゝあり、潜航艇は素より有力なる補助兵力にして、且其必要の度漸次に増進すべきも、未だ之を以て海軍の主力となす可らず大戦の教訓は過去と等しく依然戦艦が海上の主人公たるを證明し居れり。

以上諸名家の論旨正々堂々計畫の軍備未だ成らずして、已に天下の海洋を制有せるの概あるように認めらるゝ。素より米國の有識なる爲政治家の胸中には、之を以て此の大戦の爲め膨脹したる工業の經濟を維持し、又一面には國富の劇増に伴ふ世道人心の頹廢を豫防せんとする方寸もあるてあらう。夫は兎に角として此の海軍大擴張が當然の理由に基き時宜を得たる賢明なる措置であることは謂ふを俟たぬのである。斯くして一氣呵成に三年計畫を以て成立したる大擴張案は即ち左表の通りである。

戰艦	十隻
巡洋戰艦	六隻
輕巡洋艦	十隻
大型驅逐艦	五十隻
大型潜航艇	九隻
小型潜航艇	五十八隻



米國海軍の大擴張

其他水雷母艦、工作船、病院船、給油、給兵船等十數隻

三四年の後即ち大正十年此等の新艦艇が悉く完成したる曉に於て從來の計畫に屬する未成既成の艦艇と合して米國の海軍は左の如き世界第一の大兵力となるのである。

新式戰艦	二十七隻
舊式戰艦(安藝薩摩に準ず)	十三隻
新式巡洋戰艦	六隻
新式輕巡洋艦	十隻
舊式輕巡洋艦	二十一隻
大型驅逐艦	百〇八隻

大型航潛艇

十二隻

小型潜航艇

百二十隻

此等の大艦隊には給炭、給油、給水、給兵、給糧の諸船其他水雷母艦水雷敷設船工作船病院船等の、移動的軍用機關が整然と附屬して居るから世界の如何なる所に至るも、其本國同様立派に臨時の軍港を開き軍需の補給も艦船の修理も出来るのである。又其の大型潜航艇は獨逸潜航艇がなしたる如く單獨に大洋を渡航し得るは勿論小型潜航艇と雖も、母艦さへ護送せば航洋自在の性能を持つて居る。加之前記の巡洋戰艦又は輕巡洋艦には大抵二臺乃至四臺の飛行機を搭載して居るから、此大艦隊の來れる沿岸の都市は其爆彈で焼打もされ爆破もされるのである。



滑稽なる日米戦争が此海軍擴張に大關係のある譯ではないが、米國には今尙ほ日米戦争を口にするものが少くない。現に自分が面會したる人士中にも眞面目に其避く可らざるを談じたるものが二三あつて、黄色新聞は、抱腹極まる日本來寇説などを傳へて居る。紐育の旅館で某新聞通信員が、例の米國一流の淡白なる調子で『日本は銳意海軍を擴張しつゝ、あるにあらずや、而して何時米國と戦ふ心算なりや』との露骨なる質問に對し、自分は近き過去及將來に於て、日米戦争の原因を探がして何處にあるか、若しありとすれば無きを有りと誤信する連中にあるのだ。我日本には此の如き非常識のことを誤信する愚物は一人も居らない。又能く物の數理を考へ見よ新聞の傳ふる如く日本は之れから六七年掛りて僅に八四艦隊即ち十二隻

の主力艦を作らんとしつゝあるのである、如何に日本が神國でも十二隻で今三十三隻の主力艦を作らんとする米國に來攻し得ると思ふか、斯く言へば若し優勢の艦隊さへあれば來攻せぬと限らぬと言ふであらうが、古來神聖なる王道の上に立てる日本帝國は彼の覇者の如く弱國に對して決して侵略を事とするやうな國柄でない去りながら米國であれ、又他の諸國であれ、萬一東亞に於ける我傳來の權利を侵害し帝國の存立を危くすることあれば其時こそ十二隻は愚か一隻の老朽艦を以てしても極力抗戦するであらう。而して必ず其敵を微塵に擊破して見せる。若し夫れが一年二年で擊破し得られざれば百年千年立ても勝たなければ息まいのだ』と笑ふて對へて居た。兵は兇器で餘り澤山あり過ぎると今の歐洲戦争の如く兵器が逆さに人間



を役して無益なる戦争を爲さしむるに至るものであるが今度の米國海軍大擴張は其自衛軍備として先づ其國力相當の程度であると考へる。

## 世界大亂の將來

大戰の終末期——政略と戦略との混交戦——強さうて弱い獨逸——獨逸の風伏する時は歐洲に平和が來り世界に波亂を起す——主義思想は争鬭の基——誓紙證文は反古、義理人情も頼るに足らず

世界大亂の前驅とも謂ふべき歐洲の大戦は、最早其絶頂を過ぎ、其主動者たる獨逸も未だ虚勢を張つて居るもの、其内部の窮状は已に昨年夏頃より漸く暴露し來り。人力に資力に又金力に、何れの方面より打算しても、終に其屈服に歸するは疑を容れざることで、聯合國の結合が破れざる



限り、此大戦の終局は本年秋冬の交と見込んで大差無からう。

然るに、世には唯だ戦場に於ける勝敗の跡のみを見て、往々に「獨逸は今日迄勝ち續けて少しも負けては居らぬのでないか、未だ中々強くて弱味は見せてはないか」と云ふ者もあるけれども、其勝つてゐる處に負け色が現はれ、強そふな點に弱味が見へるのである。抑々獨逸として此戦争に勝を制し得る唯一の要訣は、其の多年準備し置きたる陸軍武力を以て、對敵國の戦備整はざるに乘じ、短日月に決勝を贏ち得ること、若し敵に持久の猶豫を與へたなれば、如何に強くとも到底終局の勝味はないのである。固より獨逸自身も此要訣は能く心得て居つたから、當初より迅攻急撃の戦策に出で、先づ疾風の勢を以て、西の方の白耳義を強過して佛國を衝た

のである。今日より考ふれば、無理で白耳義の中立を侵して、初めから英國を對手に立たしむるような危険を踏まず、寧ろ西方は押へて置て、當時未だ戦備上の欠陥多かりし露國に對し、真先に大打撃を加へた方が遙に得策であつたのである。然かし、之れは獨逸の豫定作戦計畫上臨機の變更が出来なかつたものとして問はず、開戦後未だ二ヶ月立たぬ間に、已に巴里の真近迄攻め入り、將に西方の戦勢を定め得る大切なる時機に、東普魯西の一隅を顧慮し、乾坤一擲の此戰場より入箇師團を割きて東方に急派したのは何たる拙ぞ。爲に彼の「マルヌ」當初の敗退を來したので、若し單に兵理上より觀察せば、此の「マルヌ」の敗戦は獨軍最初の失敗にして、而かも其最後の失敗とも謂ふべく、之れが爲め、西方戦線は今日迄の持久戦勢を



形成し、敵國に戰備の時日を與ふると共に、自ら其短期作戰の長所を全然亡失したる結果となり、他に欠陥なしとしても、此に獨逸の大事は已に去れりと見らるゝのである。

其後交戰年を越へ、一昨年の夏に至り、東の方露國に向ひ、其戰備尙ほ未だ充實せざるに乘じて、豫期以上の成功を收め、當時思ひ切て、更に押し通したならば、或は「ペトログラード」迄侵入され得たものを、之れも亦冬季の來るを期として、攻戰を中絶し、更らに其兵力を南方に割て塞耳亞に轉戰した。是より先き、土耳其を味方に入れ、勃牙利も加盟せんとするに至つたのであるから、此の南方作戰は、一寸見るも時宜を得たようであるが、矢張り之れが餘計なことである。戰爭の目的を達成するには出來得

るだけ單調にして迅速に敵の至力を撃滅し得べき手段を撰ぶのが原則で獨逸の兵書にも、其通り教へてある。然るに獨逸作戰計畫者の今度の遣口は、各方面に氣が多過ぎて、作戰目的の主従を混同したり、或は政略と戰略と分別なきような、原則違反を屢々して居る。固より土耳其や勃牙利を味方にすれば、多少は物資の融通も付き、敵軍の兵力の牽制も出来るが、何れも貧弱な小國で、兵器も供給し資金も貸與した上に、相當の援護軍隊をも附けて遣らねばならぬ、結局は獨逸自身の重荷を増すものである。加之、斯く此處彼處と戰備を擴げ過ぎるから、徒に時日を延長して、兵力も足らなくなり、何れの方面も攻勢を執るべき餘力を缺き、國內は益々物資の窮乏を告げ、當初勝味に出て、進み過ぎただけ夫れだけ、今日は其收拾整



理に困難する譯である。彼の「ヴェルダン」の難攻に數十萬の精銳を犠牲とし、半年以上を費やして、之を抜く能はず、戦略上より見れば早く見切りを附けねばならぬものを、募債増税案等を通過せしむべき對内政略のために、是非とも其の成功に執着したるが如き、或は潜航艇を濫用して中立國の商船を脅迫し、以て媾和を促進せしめんとする對外政略を試むるが如き、窮餘已むを得ずとは云ひながら、政略上の目的は少も達せられず、却て内は人心の乖離を來たし、外は中立國の惡感を増したるのみで、主眼戦略上には損する處多くて、何等益する處なき拙劣の極である。而て之れ皆當初「マルヌ」の敗戦に持久戦勢を形成したるより生ぜざる當然の因果で、自分が獨逸は勝つてゐるやうで負けてゐる、強いやうで弱いと云ふたのも此處にある

のである。況んや、戦争の大局を支配する海上は、殆ど凡て聯合國の海軍に掌握せられて、包圍封鎖の裡に孤立し、何を頼りに此の非勢を轉回し得らるべきか。砂迄喰へば、未だ二三年の繼續も出來ようが、窮乏とは食物皆無の意味ではなく、其配給の不足に對し、辛抱の氣網が切れる時を謂ふのである。若し此儘に推し行けば、獨逸の屈服は最早一年を出でず、本年九月頃には、今の「カイゼル」が世に居らねば、或は次の「カイゼル」が降伏狀に調印するやうなことになるであらう（尤も之を國民が承服す）去りながら、此戦國の世の中に、餘り先きを見越して樂觀するのは大禁物である。凡そ亂世には、棚から牡丹餅が落來るやうな事もあれば、又脚下から鳥が立つこともあるもので、元龜天正頃の我國の昔を見ても、天下



を呑んで上洛し懸けた義元が、脆くも桶狭間で首を失ひ、西の方高松城を攻める秀吉が後に本能寺の變を聞くやうな豫期し難き局面形勢の、急變は有り勝ちのものである。左なきだに、斯く荒び來りたる世界人心の變調は、二年や三年で容易に復舊するものでなく、内に外に荒び荒びて禍亂に襲ぐに禍亂を以てするのが、古來人類の歴史に實證せる處で、現下の暴魔と目せらるゝ獨逸が近く屈服するとしても、之れは唯だ歐洲の戦局に一段落を附ける丈けて開闢以來未曾有の此の世界の大亂が之れで終熄するものとは思はれないのである。本來此の大亂が何から起つたかと云へば、其近因は無論獨逸の霸氣妄想に發したのであるが、抑も亦世界の人類が、心的の人生爲樂を忘却して、物的の生存競争のみに没頭し、其罪障が積り積りて、

此の大禍亂を鬱成したのであるから、未だ未だ之れしきの流血で、晴天白日を見る譯には行くまい。彼の不徹底な自我主義や個人本位、或は間違つた民主思想や群衆心理などが、世に蔓つて其れから生み出した文物や制度が人生を支配する間は、主義思想其物が已に争鬪を起さずには息まず、物的偏長に伴うて湧き出たる、無意無心の機械兵器迄が、今日は宛かも一種の靈力を得たかの如く、相競うて人を傷け物を破らねば承知せぬのである。固より、世の中は十人一色であらねばならぬと云ふ譯のものではなく、黒も白も、赤も緑も、皆是れ浮世の綾、各色の調和其宜きを得ば、眞に綺麗なもの、笛も太鼓も調子を合せば、面白き音楽となるが、黒も白も、笛も太鼓も自己を本位に我儘を振舞ひ、銘々勝手に吹いたり叩いたりして



は見られも聞かれもしたものではない。亂世とは則ち此の節制と調和を失ひたるもの、謂ひて、大本の心的統一がなければ、晩かれ早かれ、終には此に至るべきものである。而して此の紛争の變象を目して、生存競争とか優勝劣敗とか、適者生存など、理窟を附けるけれども、其實之を唱へた古人にも、何が生やら死やら何が優だか劣だか、少しも分つて居らぬのである。斯く亂れ來りては、少數の賢者や君子の教戒も指導も最早寸效だに無く、去ればとて、誓紙も證文も當てにはならず、況して義理や人情に頼らるゝものではない。唯だ此に處するには、先づ自ら己れを統一して同心一體ならしめ、而して、銳意専心自強の道を講じ、今日の友明日の敵となるも差支へなき丈の實力を保全し、常に自ら正を踏んで他の覇氣に與みせず、

内に滿を持して外の機變に應ずるの外他に方法はないので、寸前の闇黒に提灯も持たず、身支度もせず、ヨモヤ、マサカなど、樂天して、暢氣に歩みを運ぶのは、實以て危険千萬である。若し夫れ、已に戰禍の一隅に足を踏入れながら、外侮の未だ來らざるに安じて、兄弟内に鬩ぎ、帳簿上の輸出超過などに驚喜して、資材は内を出て、正貨は却て外に残れるに氣付かず、他日の低氣壓が自家の頭上に移り來りたる時、四圍を守るべき垣根は已に朽敗し、之を應急修補すべき資力も材料も無かつたなれば、如何にして、其運命を支持するのであらうか。嗚呼何を言うても最早遅し、吾人は唯だ神明の加護に信頼し、退て筐底の古劍でも磨かう。

—大正六年二月十一日講演—



世界大亂の將來

二九八

# 軍談 終り

製複許不

大正六年五月廿五日印刷  
大正六年六月十二日發行

編者 村上貞一

發行者 增田義一

東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者 笠間音次

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所 實業之日本社

振替口座東京三二六番

東洋印刷株式會社印行

軍談  
定價壹圓



# 波のまにまに

海軍中佐

水野廣徳先生著

□定價六十錢 □郵税六錢 □三六判

出版界驚異の書  
洛陽の紙價を高く  
むるものは眞に  
本書あるのみ!

最新刊  
我帝國海軍の要路に衝り、而も我文壇に名噴々たる著者は、其の輕妙洒脱の筆を載せて歐州に遊ぶや、途上變轉として其耳目に展開されたる風物人事を捉へて深刻徹底の觀察を下し、西歐文明の根柢を解剖して國際の眞相を暴露し、筆を轉じて我日本娘論に及ぶや、彼等が淪落の身上に滿腔の同情を注ぎ、而して我帝國の醜辱を悲憤して言々是れ血是れ涙、惻々として人の心を動かし、一讀再讀卷を蔽ふを忘れしむ。

# 波上の日本

海軍中將 海軍大學校長

佐藤鐵太郎閣下述

□定價壹圓 □郵税八錢 □四六判

著者は是れ先憂慷慨の士! 或は國防を説きて帝國の前途を杞ひ、或は日蓮を論じて剛健主義を鼓吹す、本書は是れ國民の頭上に響ける一大警鐘

最新刊

物質的文明の渦中に投じたる我日本は、今や世界の儀表となり文物燦として八紘に光被すと雖も、一度顧りみて精神的文明の過程に想到すれば、眞に是れ寒心すべきものあり。著者佐藤中將憂國の士達識の人なり、常に熱烈なる至誠を披瀝し高遠なる懷抱を吐露し、議論超妙、理路透徹、天下争つて其警咳に接せんとす。今や、閣下が最近執筆に係る數十章と數篇の講話を蒐集して本書成る。滿天下青年諸君の熱讀を望む。

# 現代の政治

法學博士

吉野作造先生著

三版

□定價壹圓卅錢 □郵税拾錢 □菊判總布美本  
著者帝國大學に政治を講ずる傍、現代政治の活問題を批判す。眼中富貴なく權勢なく、政黨政派に囚はれず、高邁なる識見と深奥なる學殖を貫くに活問題を以てす。事理明白、所說深刻徹底を極め、識者をして驚倒せしむ。著者は是れ帝大の人氣を一身に集めたる新進の學者、問題は是れ活きたる政治論、其趣味多し大に讀者を啓發する僅少にあらざるや論を俟たざるなり。

# 歐州戰局の現在及將來

法學博士

吉野作造先生著

再版

□定價壹圓廿錢 □郵税八錢 □菊判總布美本  
今次歐洲戰爭の勃發以來時局に關する意見を最も多く發表せるは著者なり。豐饒なる資料と、峻嚴なる批評に滿てる著者の觀察は、一書毎に其の密度を増し、今や此の種の評論としては不可動の地位を保つに至れり。本書の眞價亦推して測るべく、著者の先著現代の政治と併讀せば、其利益蓋し莫大なるものあらん。

# 列強の外交政策

法學博士

蜷川新先生著

再版

□定價壹圓五拾錢 □郵税八錢 □菊判總布美本  
虎視耽々表に平和を装ひ暗中飛躍する列強の驅引眼前に展開して興趣無限、一讀再讀飽く處を知らず、世界の大勢を知らんと欲する者は本書を讀まざる可からず。



# 禪と健康

最新刊  
陸軍中將  
堀内文次郎閣下著

大谷句佛上人題句  
日置默仙禪師題字  
澁澤榮一男爵題字

近來青年の體力年々減退し意志薄弱となり成功の途に上る能はず甚しきは神衰弱に陥り悲觀の思想を抱いて終に自殺を計る者多きは寒心に堪えざるなり。是れ主觀的體育と精神修養の不足に由る。此の時弊を除き青年の身心を強固ならしむるに最も適當なるは是れ禪道なり。著者多年禪を研究し而も我帝國軍人の武的精神を鼓舞し、禪と健康の關係を説く、現代青年必讀の良書。我帝

定價 三圓  
郵稅 六錢  
版 六錢

## 一棒一喝

四版  
池上文僊先生著

輕妙なる奇譚百三  
十九篇酒脫なる禪  
畫三十枚興趣無限

文僊畫伯の禪畫に巧みなる世既に高評あり。今畫伯古今の禪林碩學の逸話奇行を掲ぐると共に、畫伯得意の筆を驅りて一棒一喝を揮ふ。文は畫を得て更に精新を加へ、畫は文と相待ちて其妙味を發揮し、悟道の境地豁然として讀者の心胸に現れむ。蓋し近來の快著。(新修養評)

定價 三圓  
郵稅 六錢  
版 六錢

## 話の種

再版  
湯朝觀明先生著

思想涵養の好  
食糧！精神向上  
の大指針！

本書は著者が非常に多くの時間と非常に多くの努力とを費し、多くの材料を集め、これを讀者の机上に備へて、以て精神修養、情想涵養の活經典たらしめんとせるもの、日常生活に於ける健全なる精神的修養書なり。

定價 三圓  
郵稅 七錢  
版 六錢

日置默仙禪師述

## 鍊膽術

十 定價 五圓  
郵稅 五錢  
七 定價 三圓  
郵稅 三錢  
三 定價 一圓  
郵稅 一錢

處世修養の活本領  
膽成る處、其處に自ら大雄辯、大智略、大勇氣、大人格、大見識、大威嚴、大風采備り、死生の境を超越し、凡ゆる煩惱執見を立處に一掃し、自他なく、憎愛なく、寒暑なく、苦樂なく、一切皆空、身心清淨、恰も中秋の月の如し、本書は一代の高僧默仙禪師道を説くこと懇切、眞に師の警咳に接するの感あり。求道の士は本書に依つて宜しく悟道の大法を知るべし。

鍊膽徹底の大眞義

稀世の名僧南天棒老師、心境は鏡の如く、心事は山の端の朧月に似たり。師や世の所謂口頭禪者流と同一視すべからず、その處直ちに人間精神の髓を掴み、悟道の奧秘を披瀝す。本書は百年容易に得易からざる老師の禪話集にして、趣味と實益との天泉にも譬ふべし。來つて禪の眞味を味へ。

南天棒 中原鄧州老師述

## 大悟一番

定價 壹圓 郵稅 六錢  
四六判 綿布美本

## 活才術

南天棒 中原鄧州老師述

再版

定價 六圓 郵稅 四錢  
三六判 綿布美本  
火に入つて驚かず、水に入つて感はず、生死の岸頭に立つて悠々自適、隨意隨所に自在の妙境を現出す。此の超世逸論の大修養。此の千歳不磨の大活才。禪なる哉禪なる哉。

禪の極意は  
本書に盡く



□ 著名二生先人義田奥 士博學法 □

### ▽清貧論 三版

黄金の奴隷とならんよりは、寧ろ退いて清貧を守るに如かざるなり。

質素勤儉の美風漸く廢れて、奢侈贅澤の弊習社會の上下に浸透せんとし、國富未だ充實せざるに濁富既に淫蕩の兒を生めり。著者慨歎に絶えず、奮然立つて筆を執りしもの本書一卷。勤儉力行、生々潑刺の氣風を鼓舞し質素儉約の美風を興すは、是れ實に本書の使命たるなり。

- 定價壹圓貳拾錢
- 郵税 八錢
- 四六判總布函入

### ▽學生論 再版

目覺めよ、天下幾十萬の學生諸君！諸君の頭上に一大警鐘は響けり。

著者方今有爲有望の青年學生が、動もすれば墮落の深淵に陥るものあるを歎き、眞摯健全の思想を抱かしめんが爲、筆を呵して本書を草す。著者序して曰く、苟くも改善矯風の實を見ずんば、何冊でも此種の著書をなして我が學生の反省を促さんと。以て著者の意氣を見るべし。

- 定價八十五錢
- 郵税 六錢
- 四六判總布函入

□ やゝる生の書本ず非に然偶 □

忽ち五版

### 徹底論

著者曰く

一能の小、一藝の末も、進んで全人格を打込むに至れば其處に徹底の妙境あり。底に徹せよ。生命の泉は滾々として永久に流れ、小我の城壁は打破せられて普通の我が所在に顯現せん。想ふに永久の生命と普通の我とは大小高低の差別を編し、吾等が徹底所に體得せらるゝの妙致にして此の妙致は直ちに人生活動の源泉となり、吾等斷の努力之によつて興趣を加へ、日常の生活之によつて妙味を添へん。

一般内容

徹底の意義 □ 徹底の態度 □ 徹底の國民性 □ 智的徹底の経路  
 徹底の研究者の態度 □ 徹底の人生 □ 徹底の推論 □ 近代思潮と徹底の工夫 □ 徹底の自信 □ 徹底の活力 □ 徹底の自我 □ 徹底の心教 □ 徹底の職業  
 徹底の成功 □ 徹底の人物 □ 徹底の興味

▽加藤咄堂生先著 ▼定價壹圓 郵税六錢 ▼四六判總布美本

忽ち再版

### 力の生活

著者曰く

人生は或る力を以て、何處から何處までも精神を伸張して涉るやうに致したきものなり。世には往々血氣にて伸張して往かうとするものあれども、血氣は兎角緩易きものなり。乃て人生の根本に對する健實穩當なる觀念を有して、それを以てよく精神を修養して、その力で伸張して往く様に致すことが最も肝要のこと、思ふ。此の篇は人生根本の觀念を作るべく佛教哲學の上より説けるものなり。

一般内容

世界は缺陷也 □ 人心は四端也 □ 忍耐の極致  
 物と心と同一 □ 相對と絶對 □ 不可思議 □ 安んずるの道 □ 迷とは何ぞか □ 萬波一水 □ 我家の極致  
 武士道の根柢 □ 松子孫への贈物 □ 自然界と人事界  
 死は歸生の契機 □ 松子孫への贈物 □ 自然界と人事界  
 床しき夫婦の契機 □ 松子孫への贈物 □ 自然界と人事界

▽文學博士前田慧雲先生著 ▼定價八拾五錢 郵税六錢 ▼四六判總布函入



□處世向上の指針□

▽農學博士 法學博士 **新渡戸稻造先生四大名著** △

一 識徳一代に冠たる博士が、四十有餘年の學問經驗と修養實踐とに基き、熱血を以て成れる左記四大名著は、皆是れ萬人必讀の活辭典にして、一度之を讀けば明鏡に向ふが如く、忽ちにして自己の歸趨を自覺す。

自

警言

七版

□定價壹圓七拾錢  
□郵稅拾貳錢  
□總布菊判大冊  
□金文字函入

本書は平明温健なる筆致を以て日常處世の自戒を綴れるもの、説き去り説き來りて人生行路の起伏に對する覺悟を示し、興趣無限、大いに味ふべき教訓を與へらる。讀者一度本書に對せば宛然其の人に接し、其の人の高さ説話を聴くの感あり、一讀直ちに無限の感化を學び得べし。

一日一言

三十七版

□定價六拾五錢  
□郵稅四錢  
□三五判總布美本

□修養省内の明鏡□

一青年の痛ましき半生の告白を聞き、深く感動し、爾來世の爲人の爲精神的食料を供すべく決然筆を執られたるもの即ち本書也。一年三百六十五日にあてはめ、修養に關する博士の感想を記し、尙東西古今の金言、道歌を挾ひ、苟くも意義ある生活を營まんとする人は何人も之を讀まざるべからず。

世渡りの道

十九版

□定價壹圓七拾錢  
□郵稅十二錢  
□菊判上製函入  
□紙數六百二十餘頁

其の名の如く活社會に處すべき吾人の軌道を指示せられたるもの、所説懇切を極め文章平明流麗にして、篇中溢るゝ誠意と同情とは直ちに博士に接してその高説を聞くの思あるべく、一讀直ちに世渡りの妙訣を覺り得べし。

縮刷 修養

五十六版

□定價壹圓郵稅八錢  
□ポケット型  
□函入美本  
□總革表裝三方金

品性、人格及び處世法に亘りて懇説せられたる古今獨歩の名著は即ち是れ、其の説明の親切にして同情に富める、其の材料の豊富にして趣味深き、さながら滾々として天泉の甘きにも比すべきか。眞に毎戸必藏すべく萬人一讀すべき活經典也



實業之社長 增田義一著

九版

# 青年と修養

定價五圓 郵税二錢  
菊判上製函入

□現代青年の活辭典□

如何に世に處す可きか、如何に向上發展すべきか、克己心は如何に修養すべきか、意思は如何に強固にすべきか、膽力は如何に養成すべきか、就職の途は如何、凡そ青年の心を領する凡百の煩悶、憂惱に對して、最も明快にして適切なる解答を與ふるものは、著者を外にして断じてある可からず。本書は青年に多大の同情と親切を有する著者が、多年の實驗により青年の針路を示し、修養を説きたるもの、一の空理空論なく、一々適切にして趣味ある實例を擧げ、微に入り細に亘る。本書は實に青年自らの必讀者たるのみならず、青年子弟を有する父兄、教育家先達も亦一讀せざる可からず。

大隈侯序  
蘆川忠雄先生著

# 樂天の生活

七版  
定價十五錢 郵税八錢

先づ樂天生活の本領を説き、次で之に基ける簡易生活の眞髓、天然美の影響、平和と歡喜、健康の關係、時間の使用法、富の使用法、雄大なる人格の修養法、實務の處理法、快活心の養成、社交の秘訣、家庭の圓滿讀書法等に就き、極めて明快詳細に記述したるもの。

# 強者の天地

再版  
農商務大臣 仲小路廉閣下著  
定價金壹圓 郵税六錢  
四六判 總布 入裝本

如何にして強者となる可きか本書は眞に是れ弱者の福音

優勝劣敗自然淘汰は宇宙の儼然たる鐵則にして勝つか負けるか興隆するか滅亡するか吾人の運命は此二途を出でず。されば吾人は飽くまでも剛健不撓の思想を以て自強不息向上發展を計らざるべからず。本書は人類生存の本義、宇宙と人生、個人と社會國家、生存競争の本義を説けるもの、苟くも自己の運命開拓に志す者は本書を讀まざるべからず。

# 自傷錄

再版  
東京音楽學校校長 湯原元一先生著  
定價九拾錢 郵税六錢  
四六判・總布美本 全一冊

一讀三歎  
趣味津津たる  
修養隨筆

內容大略

□自國製の文化と他國製の文化 □氣質論 □達人は大觀す □常識とは何ぞ □舊き頭と新しき日 □讀書の是非 □心の乞丐と心の窃盜 □師道論 □私立學校は必ずしも學問を獨立せしめず □官僚對政黨 □京にも田舎あれ □利用論 □節操を責め得べき女子と然らざる女子

世態、人事に關する所感を大膽率直に披瀝し、活きたる修養の根本を説く。三十八章の談論、悉く直接緊要の問題にして觀察深刻引例適切、文章暢達、以て机上の良書とすべく、自己の伴侶とすべし。益し精神資料として滋養無比。



□ 述翁門衛左市村森 爵男 □

版三

奮闘主義

定價壹圓貳拾錢  
郵稅八錢  
四六判總布

翁が七十餘年間の生活は奮闘に初まり奮闘に一貫せる活教訓にして、現代稀に見るの一偉觀たり。本書の如きは是れ翁の胸底を語れる權威ある大主張。苟も活社會に活動するの士にして本書を備へずんばあるべからず。蓋し讀者を啓發する至大ならん。

人生の戰場に赴く勇士に本二書を餞す。請ふ愛撫せよ!!

人格見識ともに我實業界第一人を以て目せらる、森村翁が七十年の奮闘より得たる經驗を基とし立志、創業、實務、經營、奮闘、良友、逆運、成業、處世等に就き縷々數萬言、悉く翁が肺肝より出づる熱誠にして、一讀翁の高風に感奮自立せざる者なし。

版十

獨立自營

定價壹圓拾錢  
郵稅八錢  
菊判總布

意志の力

五 安田善次郎翁述

定價六拾五錢 郵稅四錢 新製總布

人生の成敗は意志の強弱に依つて定まる。失敗者は多く意志薄弱にして成功者は皆意志強固也。蓋し人生發展の根柢は是れ意志の力！本書は立身向上の青少年に取り一大福音なり。

□ 茲に二つの新泉あり。向上奮闘の勇士は來り掬して其□  
□ 前途を祝し、失意敗殘の人も亦汲んで其精氣を蘇生せよ□

運命開拓の鍵は唯是れのみ。努力實行の宣傳者たる翁が、七十年の經驗を以て語れるもの。言々皆青年の血となり肉となる。蓋し出世唯一の滋養劑！懦夫も亦一讀奮起せん。

努

力

再 定價壹圓 郵稅八錢 四六判總布箱入

版 男爵 大倉喜八郎翁述



□書讀必の子男國海□

—れ來は者るす欲とんら知を地展發新の國帝—

版三  
圖  
南  
錄

長田秋濤先生遺著

▼定價壹圓 ▼郵稅八錢  
▼四六判 ▼總布美本

黑板博士序

姊崎博士序

和田垣博士跋

佛蘭西文學の重鎮として、文壇に偉大の功績を遺したる長田秋濤先生、性磊落不羈、裡に遠大の經綸を藏し、底に熱烈の血涙を有せり。晩年其の鵬翼を張らんとせしは實に南洋の天地にして、而も偉業將に成らんとして遂に斃る。圖南錄一篇是れ先生の大望を述べたるもの、而して其の絶筆なり。嘗に先生南征の一大記念品たるのみならず、新日本の青年が擧つて讀むべき快著なり。

版四  
新發展地  
南米事情

南米秘露領事館秘書

富田謙一先生著

▼定價六十錢 ▼郵稅六錢  
▼四六判 ▼全一冊

平易に實際的に南米の風土國情及び發展の方法順序、事實の性質内容等を明記せるもの、遠大の希望を有し雄圖を抱く士は速に一讀せよ

□文學士 高桑駒吉先生著

日本歴史通覽 □好評嘖々□

成大に逐年十力努

新しき要求を以て生れたる、新しき歴史にして、内容豊富、史實正確、本年度に至る文部省檢定試験問題及び各高等諸學校入學試験問題は、悉くこれを網羅す。中等諸學校及び小學校に歴史を擔當する各職員、文部省檢定試験に及第せんとする人々、各高等諸學校の入學試験を受けんとする士に取りては、無上の良參考書なり。

定價四圓 郵稅六錢  
總布美本 三十字 大冊

手紙の下手は一生の損、一封の書狀一枚の葉書が吾人の幸不幸、毀譽浮沈に關することあり。恐るべきは手紙の書き方

本書は先づ其作法篇に於て業務用、社交用、其他百般の手紙について其腹案法より構成法、文句の修練、手紙道德等一々文例によりて縷説し盡し殊に新舊書簡文を對照して現代書翰文の理想を教ふ

文法範書 翰文大全 三版

文學博士 關根正直先生  
文學士 高木尙介先生 共著

定價一圓八十錢  
郵稅二錢 總布美本



◻◻◻ 版七ち忽々噴評好 ◻◻◻

# てみ顧を國祖

入箱布綿判六四錢八税郵圓壹價定

略大容内 著生先肇上河 士博學法

曩に歐洲より歸朝せる著書が、其の徹底せる觀察と深遠なる學殖より、西洋文明を解剖せるもの。赤毛布式淺薄なる見聞録に非ず。卓越せる思想、警拔なる識見到る處に潑刺として讀者を捉へ、之を讀むに黑暗裡より光明に出でたる如く、西歐の制度文物の眞髓を始めて了解するを得。

西洋の分析主義と日本の一纏め主義○日本の家族關係○西洋の智識と日本の智識○西洋に於ける物質的文明○鍵の國○障子の國○貞操帶○釣銭の出し方の相違○マイルドの日本藝術觀○人間の茶碗と犬の茶碗○西洋の便所○尊き日本民族の血○乃木伯爵家の斷絶○人は道具を製造する動物なり

## く日報朝萬

### 男物名 十人色

大町桂月先生著  
定價壹圓郵税八錢  
四六判綿布裝本

桂月先生近來の快著  
興味津々一讀三歎

再版

桂月の文章は名物なれども、其の人物評はわけても名物たらざるを得ず。洒脱なるが如くにして、氣骨あり、温情に富みて浮華ならざる人物の反映、最も顯著なればなり。生きたる蘇峯、漱石等も交りたるが、子規、紅葉、嶺雲、東圃、乃木等數十篇、多くは故人なり。

坪内逍遙博士序  
三上參士序  
次博士序

# 江戸俠客物語

林和先生著

坪内博士の賞讃せる本書の四大特色

第一 博引旁證して實蹟と訛傳もしくは故意の牽強附會との關係を明かにし、第二 さほどの考證に力めながら兎角考證家の陥り易き支離滅裂乾燥無味の弊を脱し趣味ある復雜なる物語を構成し、第三 其時代の趨勢や人情や風俗を髣髴せしめ、第四 筆づかひに大正式の新味を加へ古き話ながら新しきもの、やうに讀まれる。

仁俠を以つて生命とせる江戸俠客活躍の跡を見よ

人物  
權藤隊長兵衛……水野十郎左衛門……唐犬 權兵衛……錦角 助六……花川戸助六……大 口 屋 晴 雨……深見重左衛門……寺西 閑 心……生不動與兵衛……夢の市郎兵衛……腕の喜三郎……新門 辰五郎。

# 現代の歴史を造る人々

鵜崎鷺城先生著

内容 大略  
數奇な白耳義國王□ニコラス大公□ロイドジョルヂ氏□土耳其の風雲兒□佛國政治の首腦□獨逸の大兵法家□露國のゴムキン氏□海上の英雄□キツチナール元帥□英國の出征詩人□白耳義の戰爭詩人□メーテルリンクの英雄主義□バーナード・ショウ氏□段祺瑞馮國璋□市欄殉難者

誰か現代を造れる！本書は世界の偉人英雄文豪を俎上に  
上せ縦横之を解剖し、現代の趨勢を説く蓋し論壇の偉觀！

【最新刊】  
定價 九 十  
郵税 六  
入 美 本 錢 錢



第七十四版(實業之日本編纂)

# 岡田式靜坐法

改訂  
增補

岡田式靜坐法が、精神を修養し、體力を増進し、萬病を快癒し、國民の心身改造に偉効あるは、社會の公認する處なり。本書は此の良法を普く實行せしめんがために著せしものにして、今や實驗者數百萬を數ふ。

定價六拾錢 郵稅六錢三五判  
圖網布紙數六百頁 金文字入  
岡田先生靜坐姿勢寫真入裝本

本書異常の大好評の下に版を重ねる六十版、紙型殆ど磨滅す。年を経る三年、書中に掲載せる實驗の諸君も其後の進境また別人の觀あり。即ち増補改版全く面目を一新して之を世に問ふ。

□靜坐法の原理及び其方法

□岡田先生靜坐創規の經歷

定價四  
郵稅六  
五錢  
五錢  
拾錢  
入本

□一日も早く實行し體質を改造せよ□  
本書は我教育界に於て、令名高き日比野校長が、多年自ら數千の學徒を訓練したる實驗によりて得たる確信を語るものにして、最新最良の運動法なり。されば一般學生は勿論、世の教育家は再讀三讀し、一日も早く採用實行せられんことを切に望む。  
愛知縣立第一中學校々々長 日比野寬先生著

## 基礎健康法

再版

## 簡易 斬新 實用的強健法

七版

伊藤銀月先生著 大增補

其青年時代體格虛弱、根氣なく精力なく意志薄弱到底實社會に活動するに堪へざりし著者銀月先生の苦心發見せる三十秒間の緊張法と三十秒間の弛緩法。著者は之に依りて今や體格偉大精力絶倫二日三晩不眠不休も疲勞を感じざるに至る。切に薦む。  
□一分間の運動にて偉効ある強健法□

定價四  
郵稅六  
九錢  
拾錢  
入本



318  
360



終